

小田原史談

第 152 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20

昔今原小田 谷津(現城山二丁目)から菟窪 にかけての景観の変貌

晩秋に撮ったのだろうか。手前は芒は未枯れている。真中の白い帯状に横たわっている光景は、刈り取った陸稲を干したものと思われる。切り株の跡も見える。

左手中央の平地の水をたたえた部分は菟窪の養魚場である。そこは現在小田原市役所や中央公民館がある場所だ。ちなみに養魚場のことに、ちょっと触れると、大正十一年(一九二二)、小田原蒲鉾商組合が材料の魚のアラを有効に利用しようと、鰻の養殖を始めた場所であった。

遠方かすかに井細田の鎮守八幡さんの森や、多古から久野にかけての丘陵上の木々の繁みや、さらに右手には、酒匂川堤防上の松が映っている。

一番下の写真は、尾崎亮司(小伊勢屋先々代)が、この谷津の地に競馬場を設置するため、その開削に先立って、周辺の景観を記録に留めるため残したものである。撮影は、

大正十三年(一九二四)頃と推定される。

尾崎亮司は、ある人から競馬場を開いたらという話を持ちこまれると早速その話に乗った。尾崎は、大正大地震で潰滅的打撃を受けた小田原の復興を真剣に考えていたのである。

尾崎が個人的に支えていた「小田原保勝会」を財団法人とすれば、競馬の開催権が得られると信じ、その収益を財源として、町の復興を目論んだ。競馬場造成の工事費の多くは尾崎が立て替えたが、その回収もままならず、小伊勢屋の身代を揺るがせるに至った。

この地は、水の便が悪く、住宅地向きでなかったが、昭和十一年(一九三六)代、わが国経済が高度成長期に入って以降、家が頻りに立てられるようになったのは、昭和三十年(一九五五)代、わが国経済が高度成長期に入って以降の事である。

(岡部忠夫)

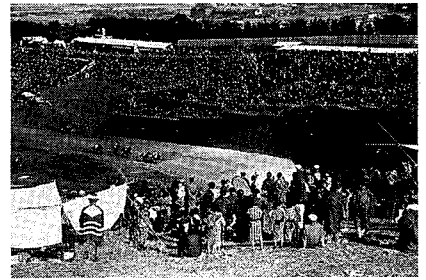
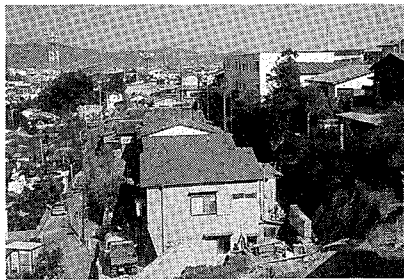
平成5年撮影

平成5年撮影

昭和2年(1927)撮影



小田原市庁舎・中央公民館



小田原市庁舎・中央公民館

撮影大正十三年(一九二四)頃

尾崎正氏所蔵

小田原叢談(三)

石井富之助

大だいまつ

お盆の七月十六日の夜、千度小路下の浜で行われた浜せがき大だいまつは何と云っても小田原最大の年中行事だといってよいであろう。

浜せがきのことは『新編相模国風土記稿』の徳常院のところに、

毎年七月十六日の夜、海浜でせがきを修行する。漁業者の勧進によるものである。船を浮かべ、百八のたいまつを立て、すこぶる壯観である。

とあって、江戸時代から行われたことは間違いないが、起源ははっきりしない。海でなくなった人たちの霊を供養するために漁業者が始めたもので、百八のたいまつをともし、導師は徳常院の住職が勤めた。

大正九年八月発行の『小田原の史実と伝説』には、

百八のたいまつは無限量の百八煩惱をかたどり、燃えあがる火の光は佛光を意味するものだという。そして、果しない海原にさ迷っている水死者の靈魂を照らし渡すというのがこのせがきの主旨だから、たいまつは高いほど遠くを照らし、その意にかなうわけである。と書いてあるが、これで大だいまつのいわれはおわかりであろう。わたしの子供のころは百八のたいまつはもうなくなっていて、たまにいくつかあったこともあるが、だいたい大だいまつ一つだけになっていた。ところが、十メートルぐらいいもあつたか、この大だいまつがなかなかうまく燃えてくれない。どうやってもうまく長く燃やすことができるか、これには相当苦心

をしたようで、同じ本の中に岡本治兵衛談というのが載っている。

世話役である岡本氏などは非常の苦心を年々重ねているので、従来の例によると点火時間からせがきの終るまでつごうよく燃えたことがまことに少なく、あるいは早く燃え尽くした末、今年には新機軸を出し、ぶり敷きに使った孟宗竹三十本を山田又市氏から譲り受け、長短二十四本を互い違いに組合わせてしんに入れ、その外側を六本の竹でかこい、それを俗称タカギという箱根二子山のしの竹でさらに包み、早く燃えつきないように針金で細かく巻き、その上を荒なわでくくったところ翌朝まで燃えていたというのである。ある時は経費の関係から古電柱を使ったが、しんが堅くて結果がおもしろくなかったので、来年は今年のように孟宗竹を使い、しんとなる竹だけをつごうよく割っておいたら、さらによ

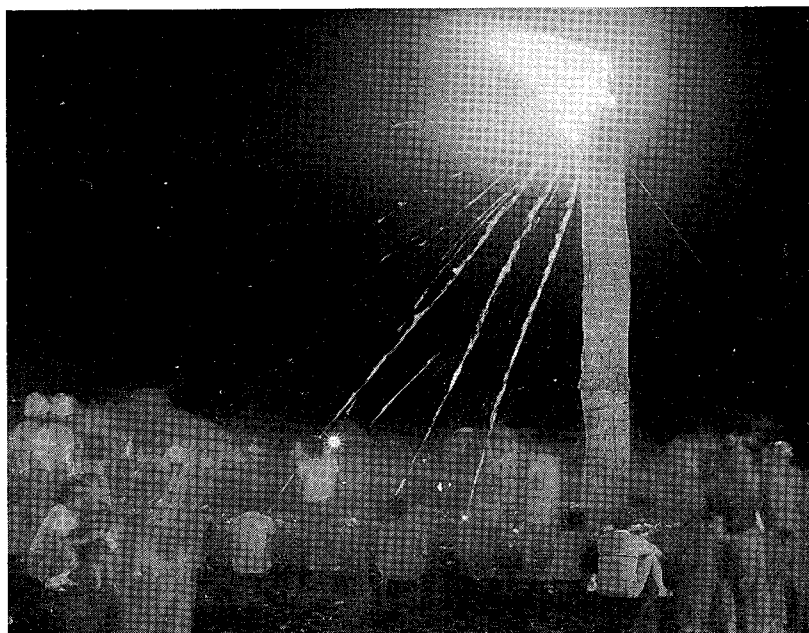
い結果が得られるだろうとの事である。

苦勞はこれだけではなくて経費も思うように行かず、大正初年には廃絶するところまで追いこまれたが、小田原保勝会の後援で続けることができたそうである。

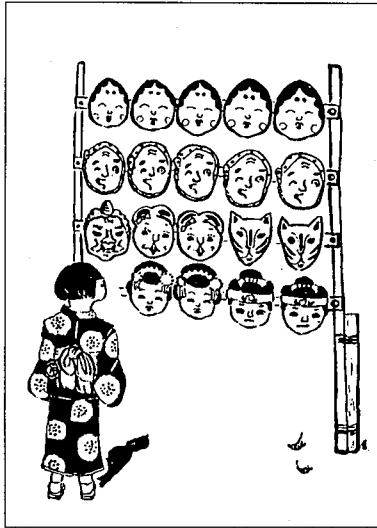
大だいまつには小田原の町民はもとより、近在の人

大だいまつ

久保田重孝



たちも出かけてくる。わたしも毎年父といっしょに行っていたが、千度小路から入ると混雑なので、御幸の浜通りからまわって行く。それでもいっぱいの人出で、その間を縫って浜の子供たちが小さい箱に線香を入れ、「せんこヨシカネ、せんこヨシカネ」と売りにくる。この線香は浜へおりてか



カット 内田美枝子

ら砂の上に思い思いの形にさし、その中に入って大だいまつを見るのだが、この線香をさすというやりかたは、どうやら二十六夜待ちの風習がまじってしまったものらしい。このことは次に書くつもりである。

大だいまつはずっと続けられてきたが、湘南海岸バ

飯泉のお観音さん

飯泉のお観音さんといえは板橋のお地藏さん、大だいまつとあわせて小田原の三大年中行事といつてよいであろう。

年の暮れも押しつまった十二月十七日から十八日にかけて、飯泉の飯泉山勝福寺でだるま市が開かれる。ここは板東五番の札所で、御本尊は十一面観世音であ

イパスの工事が始まったりして、昭和四十年ごろから廃止されてしまった。時の流れとはいいいながら、城下町小田原の行事として何か惜しい気がしていたら、数年前からまた復活したのはほんとにうれいことだと思っている。

るが、俗に「飯泉のお観音さん」と呼ばれて、西湘地方一帯の崇敬的となつて

だるま市は遠く永祿年間(約四百二十年前)にはじめられたといわれているが、『飯泉観音略記』には、
歳の市御縁日 十二月十七日、十八日、古来より千両市といひ、東

国だるま市の起源をなし、昼夜にわたつてにぎわう。

としるされている。板橋のお地藏さんもそうだが、千両市というのはこの市が非常に繁盛して、千両の商いがあつたというのでこう呼ばれたのだそうである。

またこのだるま市が東国だるま市の起源だといつては、発祥年代の古さをいっているのではなくて、玩具研究家の有坂与太郎氏の説によれば、このお観音さん

のだるま市を振り出しにして、十二月中は神奈川県下一帯で開かれ、年が開けると埼玉県の大宮に転じ、さらに関東北部の機業地へ移つて行く、そのだるま市の中で一番早く催されるものだという。

子供のころここにままつて父といっしょにお参りに行つた。妙なもので、十七日の夜という寒いから風が吹く。マントを頭からすっぽりかぶつて、多古から吹きさらしの川原に出ると、木のつり橋がある。それがグラグラ揺れる。この橋は中州までかかつていて、その石ころのゴロゴロ

した中州をちょっと北へ歩くと、また一つ、つり橋が向うの土手までかかつている。この中州の寒いこととばいったら一時には吹きさらされそうになったりしたことを、今でもよく覚えて

る。参道に入ると、西側にはだるまの店、おでん屋、甘酒屋、菓子屋などが並んでいて、そこから立ちのぼる温かいにおいと人いきで、今度はのぼせ上るほどであつた。

縁起のだるまを買つて帰ると、入れちがいに店の者が、えり巻きではおかぶりをしたり、ドテラを着こんだりしてゾロゾロ出かけて行く。まるで百鬼夜行そのままの姿であつたが、十時ごろ出かけて帰るのは真夜中になるのだから、これでもちっともおかしくなかつたらしい。

だるまは小田原でもいくらか作られていたらしいが、神奈川県では平塚市四宮のだるま、厚木のだるま、梅沢のだるまなどが有名な産地で、おそらくこれらのだるまがみんな集つたのである。ところ、

お正月がござつた
どこまでござつた
飯泉までござつた

なにに乗つてござつた
ゆずり葉に乗つて
ゆずりゆずりござつた
というわらべうたが伝わっている。

このうたは東京から埼玉県一帯にかけては、三行目の「飯泉」が「神田」となつて流布されている。神田といえは、お盆の七月十五日にお精霊さんが買い物に行くといふことで弁当を作つて供える。どこへ買物に行くのかと母に聞いたら、神田へ行くのだといつた。お盆は神田なのに、暮れには飯泉になっている。おそろしく、はじめは東京と同じ神田であつたものが、このだるま市と結びついて飯泉となつたのであろう。

どっちにしても飯泉のお観音さんがくると、お正月が間近に迫つた感じで、忙しい中にもなにか浮き立つような気持ちがしたのは、子供ばかりではなかつた。このうたはそういう気持ちを、なんと心憎いばかりにうたいあげているではないか。

駅弁物語(二)

わが故郷山北の

三喜久満

うるか

私が軍隊から除隊になって、日本鋼管(株)浅野船渠へ入社して間もなくのこと、昭和十六年七月頃の話である。

工場の技師長で萱島英男と言うとても偉い人がいた。

社内では何時も作業服を着ていたが身だしなみが悪く、禿げ頭で地肌が汚く、その上にと近眼で、不潔な感じを持つ風采の上がらない人であった。

ところが、この人は、一高から東京帝大の機械科を出られた、まことに超一流の人であった。だから仕事となると良く識っていて非常に五月蠅い人であったが、私のような事務職員の駆け出し者に対しては、至って穏やかで優しくかった。

或る日のこと、偶々私の机の向い側が空いていた。萱島さんはぶらりと来てそ

こへ腰を下ろした、今日は暇であったのだろう、私に向かって話し掛けて来た。「君は何処の出身だ」と。

私は即座に胸を張って「神奈川県山北です」と答えた。

萱島さんは度の強い眼鏡越しにニコニコしながら「うーん！昔の東海道線山北だな、そうか、それなら季節になると駅弁で鮎寿司を売っていたよな。今でも、うるかを売っているか」と懐かしそうに尋ねられた。

私は一瞬間聞いたこともない言葉に驚いた。言葉の様子だと品物のようだ。そこで私は勇気を振るって「うるかって何んですか」と尋ねた。

「お前、うるかを知らないのか、知らなければ山北はもぐりだな……」と笑いながら席を立てて工場の方へ行ってしまった。

「山北はもぐりだな」と聞いた私はショックだった。その日家へ帰って早速父に話をした。父は、

「うるかとは鮎のはらわたを塩辛にしたものよ、酒を飲む時にはもってこいの肴だな、それ！ここに小壺がうるかの入っていた物だ」

と食卓の小さな器を指差し、教えてくれた。この器は昔から見たものだった、改めて手に取ってみるとうるか黒く書いてあった。然しその時には入れてあったものは鯉の塩辛であった。

鮎寿司と樋口屋

山北の北西から南へ回って流れている酒匂川と言う綺麗な川がある。関東地方は東と南に太平洋があるから、南東の風、南西の風が吹いて富士山・箱根山・丹沢山とに年間を通してよく雨をもたらししてくれる。

従ってこの川は流量が豊富である。大正の初期頃までは本場に鮎が沢山とれたとのことであった。だから父が鉄道の偉い方を招いて鮎魚会を催したのもこの頃であった。

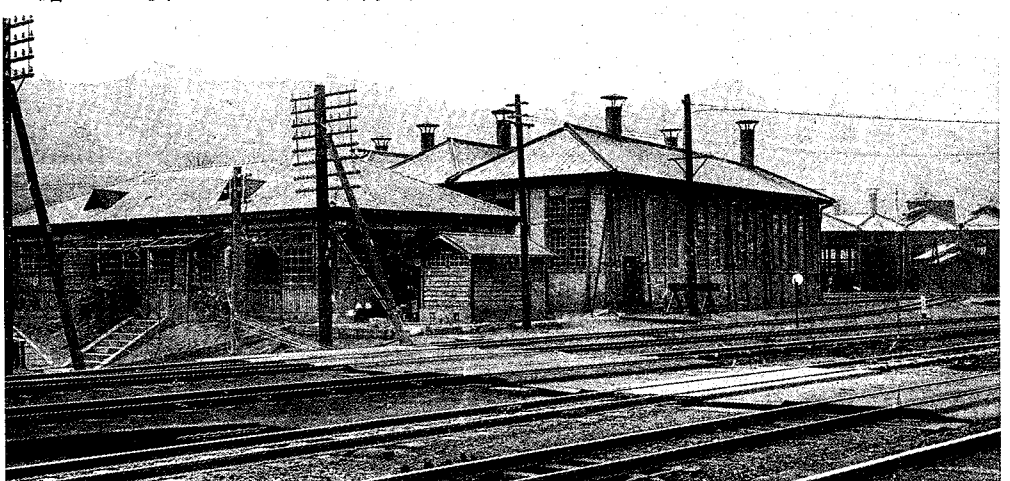
この水量豊富な川に目を

ありし日の山北機関庫 岳陽新聞社提供

つけたのが静岡県駿東郡小山の富士紡績(のち電力部門が別会社)である。大正の初期よりこの川の沿岸に発電所が次々と建設され、堰堤が出来て水の流れが変わって鮎の住む場所が無くなってしまった。

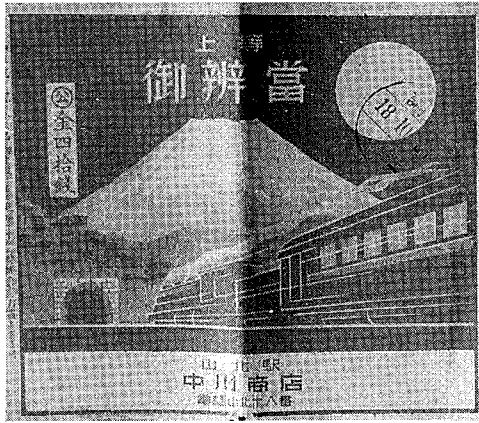
それに輪を掛けるように大正十二年(一九二三年)九月一日の関東大地震は震源地が丹沢山塊だから山崩れが随所に起こり、大雨による洪水で川はすっかり荒廃してしまい天然鮎は絶滅した。

地震後十年にして国の治山治水の工事が進んで、漸く酒匂川も雨による異常な出水なく通常の流量が安定して来た。養殖鮎の放流と天然鮎の湖上で再び鮎の



川として復活したのであるが、大正初期のようなわけにはいかないと地元の人々は言っていた。

日本全国で東海道線山北駅の鮎寿司を知っている人



は、先ず関東大震災以前に
山北駅を往來した人達であ
る。私が山北駅の鮎寿司の
記憶を辿ると五歳頃の大正
十二年より以前であるから
本当に臍氣である。
昭和二十年(一九四五)八月
日本が大東亜戦争に敗れて
十数年後のことであった。
私が東京本社の人達と下
呂温泉の旅行に行ったこと
がある。その途中岐阜の駅
で名物の鮎寿司を幹事が買っ
てくれた。それを手に持っ
た時は懐かしかった。早速
開けて見るとプーンと、酢
の匂いと鮎の香りであった。
私は思わず「これだ!」と
叫んで目を閉じた。子供
の頃食べた山北の鮎寿司が

私の脳裏に蘇えったのであ
る。嬉しかった。何とも言
えぬ回顧の情に駆られた。
鮎の姿寿司は、今では首
都圏では時期になるとどこ
でも売られているが、私が
子供の頃は季節のもので、
六月頃より夏の間で特定の
ところではしか売られていな
かったのである。
山北駅の鮎寿司は中川の
弁当屋では造っていないかっ
た。樋口屋で造っていたの
である。その経緯を次に述
べよう。
山北の西の外れに皆瀬川
と言う川が流れている。現
在で言うならば東名高速自
動車道の都夫良野トンネル
の東口の附近に鉄橋が架かっ
ている深い谷

川がそれであ
る。この川が
酒匂川に合流
している谷の
出口に橋が掛
かっている。
この橋を樋口
橋と言う。
その橋の
袂に樋口屋
と言う旅館が
あった。この
旅館は皆瀬川
の川辺にあり、

その川に流れる水は実に清
冽であり、またその附近の
景色は、春・夏・秋・冬と
格別の変化があり、山峡の
実に閑静な絶好の場所に位
置していた。
春浅き山々に咲き誇る山
吹や山つつじの素朴な花の
後、梅雨に煙る緑の山を賞
でもる良し。
六月、酒匂川の鮎の漁期
になって、太公望に非ず釣
天狗になって来たり泊まる
のも楽しい。
真夏には涼を求めて来た
り、河鹿の啼く声を聞きな
がら逗留するのも味のある
宿である。
秋から冬にかけて山が燃
えるような紅葉に変わる頃、
狩猟が解禁になると都会か
ら多くのハンターが繰り出
し、この宿を足場に集まっ
た。
このように四季折々の風
情や野趣を味わう為この樋
口屋へ来る顧客は多かった。
それと言うのも山北駅に
急行や特急が停るので東京
から意外に近かったからで
あった。
それ故に明治、大正の時
代、秋の狩猟期には東京か
ら華族様・政府の高官、政
財界の名士が来たりこの宿

に滞在して鉄砲狩猟を楽し
んだ、と言うことで、宿の
主人内田勇吉さんは、その
案内役で多忙を極めたと、
勇吉さんの息子公平さんが
語ってくれた。
また一方、この旅館の絶
好の環境に目を着けた鉄道
は鉄道指定旅館の看板を与
えたのである。鉄道は各部
局の会議をこの樋口屋で開
く。
従って、山北駅に駐在す
る各部署も做って樋口屋を
使った。此処は町から余り
離れていないが、人目を避
けられたことも好条件であっ
た。このように樋口屋は年
中客の出入りが多く繁昌し
たのである。
しかし、鉄道が国府津か
ら小田原、熱海へと熱海線
が開通した時から、風光明
媚な、そして昔から著名な
温泉地として知られる箱根、
湯河原、熱海へと客は流れ
た。鉄道の会議も温泉地で
行われるようになり樋口屋
の客は激減して来たのであ
る。
昭和三年(一九一八)昭和天
皇御即位の御大典が京都で
行われる時のことであった。
天皇陛下のお召列車も山
北駅に停車し補機を付け、

補機は御殿場で進行中手動
で切り離された。お召列車
は大きな炭水車を連結し、
無煙炭の高カロリーの燃料
を積んでいるから、山北を
出発すると京都まで無停車
で走ったのである。
名古屋の第三師団長閣下
は、そのとき、山北迄天皇
陛下を迎えに来て、この
樋口屋へ一泊しお召列車に
同乗し、第三師団管下の静
岡県、愛知県、岐阜県、の
軍状を奏上し京都迄お供し
たとのことで、公平さんは、
誇らし気に肩をいからし一
段と声高く語った。
時代は遡って明治二十二
年(一八九九)の頃であった。
樋口屋内田勇吉さんの母
「たけ」さんは、大変気丈
な方で頭も良く、手先も器
用で、いろいろ創意工夫を
された人であった。
地元の酒匂川で獲れる鮎
に手を加えて鮎の姿寿司な
るものを考案試作したとこ
ろ、見た目も美しく味も素
晴らしく、鮎の香は高く立
派な寿司が出来上がった。
たけさんはこの鮎寿司を折
詰にして、山北駅のホーム
へ行き列車の乗客に「山北
名物鮎寿司の姿寿司」と呼

び売りしたところ、この素朴な即席の寿司に人気が集まり立ちどころに売れてしまった。

これに勢い付いたたけさんは地元で、調理を系統化し量産し、自ら駅へ出て売り、お客の反応を見た。鮎寿司の評判は頓に上り、山北駅の鮎寿司が東海道線で有名になり定着した。

その頃山北駅では中川商店がお弁当を盛んに売っていた。中川は鮎寿司には手を出さなかった。それは鮎が季節ものであること、新鮮度、入荷量の確保、相場の変動等で不安の材料が沢山あったからである。

明治二十二年(一八九)東海道線が神戸迄全通したことにより鉄道内部の制度が整備確立されて来た。駅での乗客に対する物売りが野放しになっていたので特定駅に限定して「駅一軒」となった。山北駅は中川商店(瀬戸浦太郎)に鑑札が降り、樋口屋のたけさんの鮎寿司売りは駅から締め出されてしまった。

しかし、余りにも有名になった山北駅の鮎寿司であるから弁当屋中川に委託し

て販売することになったのである。鮎寿司は中川の掛紙を着けて一日に何回となく運ばれて売り切った。

鮎寿司の需要が伸び続けたので地元で捕れる鮎ではとても間に合わず、樋口屋は静岡県の興津や鳥取県から鮎の塩漬けを四斗樽の菰包で幾樽となく仕入れたのである。寿司の折箱も吃驚する程大量に入荷し、それがどんどん捌けていく様は見事と言うより凄まじかったと言ふことである。

関東の大地震で東海道線が不通になり、再び開通した時に中川でも鮎寿司の製造を覚えて瀬戸浅次郎名義で、樋口屋と両者が中川に納めるようになった、と言って内田公平さんは話しを終った。

私の記憶では、地震以後再開した山北駅の鮎寿司はなんとなく人氣が下火になったように思われた。再開して間もなく買って食べた鮎寿司は矢張り地震前のが美味しかったと、父も姉も言っていた。

昭和九年(一九三四)十二月一日、東海道線が丹那トンネルを通過し、山北駅が御殿場線の一駅となった時、

かつての諸設備は次々と解体撤去又は移転し、大勢いた鉄道員とその家族は東京鉄道局管内の適当な所へ移動して行った。

そしてさしも殷賑を極めた山北の町は往時を偲ぶ何物もない寂しい町となった。その時点で山北の鮎寿司は名実共に消え去ったのである。弁当屋中川は食糧事情が悪化した戦争中に廃業した。樋口屋は旅館として残っていたが営業不振で勇吉さんが物故してから世代の交替と共に息子公平の代で旅館も廃業してしまった。

私の妻テツは、この樋口屋の内田勇吉さんと妻の実家との関係を次のように物語った。

妻の父源太郎と勇吉とは従兄弟で同じ内田の姓であった。鮎寿司を考案し売り出した「たけ」は源太郎の父内田勤助の姉であった。また、源太郎の妻たつ(小田原市曾比出身)と勇吉の妻りき(南足柄市塚原出身)とは従姉妹であったのだ。

そのような関係で両家の関係は深く、往来は繁しかった。また偶々鮮度のよい鮎が大量に入荷すると、たけさん自身がわざわざ持って

来て「勤助や、食べてくれやあ」と暫く世間話をして帰って行った。

私の妻テツの姉さきは病弱だったので、りきさんが「今日は珍しく鮎がはいったよう」と鮎と一緒に持ってきてくれたことが屢々であった。まして田舎のことだから盆・暮・祭礼・何か事

ある度に双方の交流が数多かったのである。大東亜戦争中から、互に交際は疎遠になり、世代の交替が進んだからは双方の親が死んだのも判らぬ他人のようになっ

てしまった。平成元年秋、偶々私は用事があって山北へ行き、樋口橋附近が変わったと聞いたので散策した。

昔瀬川の川辺で昔繁栄していた樋口屋の敷地は広く樹木は繁つていて、僅かに往時の名残を留めているものの、附近一帯の様相は全



鮎ずし元祖 樋口屋 岳陽新聞社提供

く変わった。国道二四六号のバイパスが通じ、樋口橋に並んで新樋口橋が出来て大型トラックが行き交う日本の大動脈に変貌した。従って排気ガスと騒音が激しく、閑静だった昔日の面影は無く、鄙びた旅館は取り壊されて偲ぶ何物もない。そこにはしもたや風の公平さんの家と物置が寂しく建っていた。

ここにも時代の変遷を如実に物語る物悲しい山北の姿の一齣がみられたのである。(了)

三月十日

東京大空襲を顧みて (三)

松本巽

電波探知機「タ」号

高射砲は、他の砲と違って、空中の標的に当たらずとも、信管の目盛によって空中で爆発するようにしている。

そうしないと地上に落下して爆発して、戦場では友軍が、内地では民間の人々が被害を被る事になる。

それだけに、高射砲の照準は、他の砲より難しさがああり、空中で爆発するよう秒単位の刻みで、信管に時間を設定するわけだ。

信管に時間を設定するには、旧式の八八式七・五センチ野戦高射砲の場合に手で目盛に合わせる作業が必要であったが、九九式八センチ高射砲では、薬莖を装着した弾丸の先端の信管を上から信管設定装置に入れただけで、自動的に、時間が設定されるようになっていた。

なお、目標の敵機に対し二十五メートル以内で爆発すれば有効とされていた。

ともかく、私たちは将校下士官、兵共に、新しい九九式に期待をかけ、日夜訓練に励んだのである。

また、第十号陣地に布陣する独立高射砲第一大隊には、電波探知機が配備された。今では魚群を探知するにも利用され、広く知れ渡っているが、当時としては画期的なものであった。いう迄もないが、雨の日や曇った日、また夜曇っていて、敵機が見えないとき、その位置、高度、速度を測定するものであった。ついては、電波探知機について、防衛庁編纂の『戦史叢書』一九「本土防衛作戦」から引用してみよう。当時陸軍は、電波探知機とはいわず電波標定機と呼んでおり、独立高射砲第一

大隊には、三型が二基配置されていることが記されている。私が知っているのは、第四中隊陣地に配備されているだけで、他の一基が据えられた場所については分からない。

電波標定機には、一型より四型まであり、東部高射砲集団には、全部で六十三基が配備されていたという。

電波標定機の歴史をみると、日本陸軍がその研究開始をしたのは、昭和十四年(一九三九)頃である。

イギリスでは、既に一九三七年に探知用レーダーを完成し、四十年ロンドン防空に偉功をたてた。だが、わが国では基礎研究が不十分で完成が容易でなかった。開戦後、わが軍がフィリピン・コレヒドール島でアメリカ軍の電波警戒機を、シンガポールでイギリス軍の電波標定機を、それぞれ鹵獲し、これらを資料とし

て活用して電波兵器を急速に完成するための努力が拂われた。

一型、二型は、昭和十七年(一九四二)十月頃試作機が完成したが、十分な成果が発揮されず、また故障が多いため、三十台生産しただけで打ち切りとなった。

一方、シンガポール及びコレヒドール島で鹵獲の器材を、陸軍技術本部で、昭和十七年末、復元作動に成功した。そこで、英軍式を三型として住友通信工業に、米軍式を四型として東京芝浦電気に製造させ、双方、昭和十八年(一九四三)十一月頃完成、高射砲部隊で実用

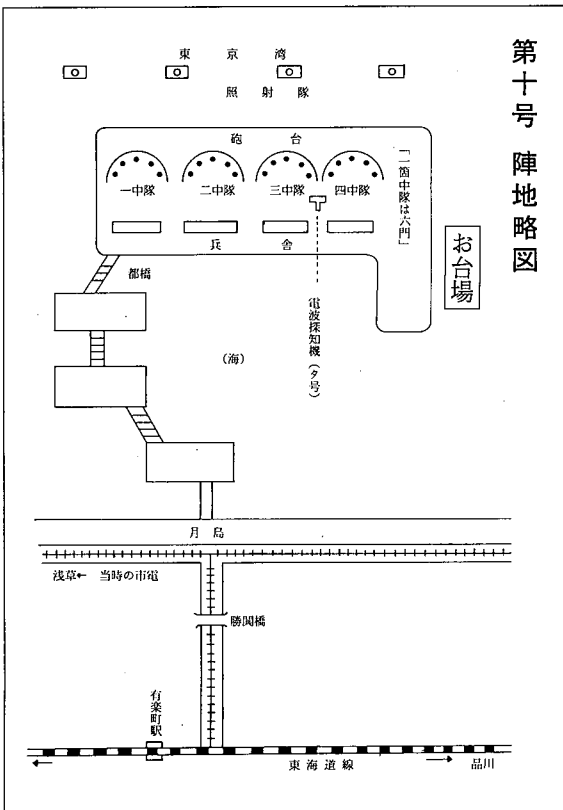
試験が行なわれた結果、三型は実用の見通しが立ち、四型は、まだ十分でなく改良の余地があった。

結局実用化されたのは、三型だけで、昭和十九年(一九四四)半ばごろ月産二十台から三十台、終戦迄約百七十台が生産されたという。

当時、東部軍では、東京の東部地区及び防空上の弱点と考えられていた東京湾沿岸に展開する、高射砲大隊本部及び重要な高射砲陣地に装備されるようになっていた。

東京湾の正面に布陣する独立高射砲大隊に電波標定

第十号陣地略図



機が配備されたのは、このような事情があった訳である。当時としては、私たちにとってはその辺の事情を知る由もなく、ただ素晴らしい新兵器が登場したものだ。ただ感嘆の気持でいっぱいであった。

そして、この新兵器は、正式な名称が用いられることはなく、単に「タ号」と呼ばれていた。簡略した呼び名は、利用上の便宜性というよりは、軍事上の機密を漏らさないためのものであったかも知れない。

この、「タ号」によって射撃する方法を「タ号」射撃とって、雨の日や夜間訓練で実施された。

また、夜間にしばしば照空隊と共同演習が行なわれ、友軍機を仮装敵機として訓練が実施された。照空隊は、高射砲隊の前面の海上に分隊単位で小型の船舶に搭載、二箇分隊が共同で、低空でやってくる敵機を照空灯の光が交叉する点で捕え、高射砲隊の射撃目標を定め易くするのがその役割であった。照射が居かなくなると、次の照空隊が照空するようになっていた。

なお、小型船舶というの

は、前掲『戦史叢書』によると、東部軍が不十分な防空配備を強化するため、徴用した機帆船で、それに照空灯を装備し、来襲機に対し照射を実施すると共に、防空監視に当たった。このため徴用した船舶は八隻、連絡用漁船及び救命艇六隻で、東京湾に応急配備されたのは、昭和十七年(一九四二)三月末ごろのようであると伝える。

初年兵教育係となる

昭和十九年(一九四四)四月、陸軍上等兵に進級した。一緒に入隊した十三名の同年兵のうち進級したのは、二名であった。俸給は十二円から十六円となった。

進級と同時に初年兵教育係助手を命じられた。教官は吉村少尉、助教は中鉢軍曹であった。

初年兵は約三十名。うち十名は朝鮮半島から入隊の初年兵、あと二十名は内地より入隊した現役の初年兵であった。

朝鮮出身者でも、全員日本語が出来るので、教育に当たっても不自由なく、内地の初年兵と一緒に、全く差別なく同じ訓練をした。

現役兵とい

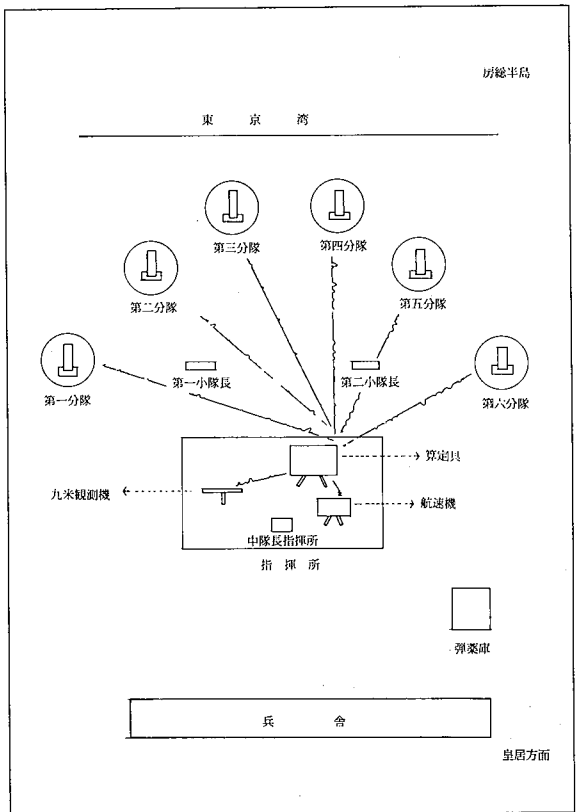
えば、満二十歳で徴兵検査を受け、その中で体格のよい者が選ばれて入営することになっていったが、もう、そうではなかった。前年の昭和十八年(一九四三)十二月に徴兵適齢が一年引下げられ、十九歳の青年が入って来た。それに甲種乙種、丙種の区別なく、病弱者以外、兵役に耐えらる者が入隊してきたのである。

朝鮮に徴兵令がしかれたのを今調べてみると、昭和十八年三月二日の兵役法改正によるもので、八月一日実施されている。

朝鮮から入隊した者は、比較的優秀な資質を持ったものが多かった。

その中に中学校(旧制)を卒業した者がいた。彼の名は金田といったが、本名は金である。

話は先にとぶが、終戦になってからの事である。



栗田(本名は栗)という朝鮮出身兵が急に、「松本上等兵殿のところへ雇ってもらえないでしょうか」

と、言うではないか。朝鮮に戻っても働く所がないという訳である。私は当惑した。彼の生涯を伴男として留め置くことは出来ない。仮に一時的に野良仕事を手伝わせるにしても、家族の労働で充分に間に合う。戦争中食糧増産の掛声で蜜柑の木は、かなり切られて、再び蜜柑栽培を再興することになるが、

当時は、まだはつきりした目算もなかった。それに、

軍の残務整理に残される立場に置かれた私である。「朝鮮は独立国となった。日本に置く訳にはいかないだろう。また、故郷に戻れば何かしらの仕事があるに違いない——」

と、彼に言うよりは他はなかった。

朝鮮出身者も内地よりの入隊者の中にまじり、訓練も起居も共にした、三カ月間の初年兵教育は終了した。

すでに、南方戦線も益々日本にとって不利の戦況となり、マリヤナ諸島の失陥と共に、米軍B29の基地が整備され、本土空襲も間近に迫り、私たち高射砲大隊

は緊迫の度を加えていった。大学生も繰上げ卒業で学徒動員されるようになった。

私達十号陣地には、昭和十九年七月、早稲田大学、明治大学、中央大学等東京にある大学の卒業生が二十名ほど入隊して来た。将来幹部候補生となり、将校あるいは下士官に任官する要員で、三カ月間、私たちの隊で教育され、甲種幹部候補生に選ばれた者は予備士官学校へ入校するのである。

私は、三カ月間の現役兵の教育が終ると、引続き学徒動員兵の教育係助手となり指導することになった。

それは、高射砲の操作、夜は『射撃教範』や『戦陣訓』についての学科の教育を行なった。そして、三カ月後、幹部候補生たちは、全員甲種幹部候補生として予備士官学校へ転属していった。

なお、私は照準砲手のため、交代要員がいなかった。ので、初年兵教育期間中であつても、中隊の演習のときは、第六分隊員として演習に参加した。

B 29を東京湾で撃墜が任務
東京は、皇居を中心として周囲に百箇中隊の高射砲

隊があつたといわれていた。東京湾を前面にして布陣の東京防衛隊は、高射砲隊及び機関砲隊から成つていた。

私たち高射砲隊は、房総半島より侵入し東京を爆撃後再び房総半島より脱出するか、または、駿河湾より富士山を目標に侵入、山梨県大月を経て東京を空襲し房総半島を脱出する、敵B 29を東京湾に捕捉撃墜するのが任務であつた。

機関砲隊は、敵空母より発進、低空にて機銃掃射する艦載機を撃墜する任務を持っていた。

十号陣地では、高射砲の廻りに土を盛り、空襲に備えていたが、更に土を盛り上げ、砲身が見えるだけに高くして、敵機の機銃掃射に備えた。

B 29の初空襲

昭和十九年(一九四四)十一月二十四日十二時、空襲警報が発令された。いよいよ敵機がやってくる。

始めてのB 29超大型爆撃機の日本本土空襲である。我々高射砲隊にとっては、始めて九九式八センチ砲で実弾を発射、敵機を迎撃を

するのだ。

中隊長以下兵に至るまで日本軍高射砲の威力を見せてやろうと、今かいまかと待ち構えていた。

いよいよ房総半島の方向より敵編隊が見え始めた。一梯団十数機ずつの編隊である。五、六梯団はあつただろうか、その点記憶は定かでない。

ともかく緊張した一瞬である。

……………

敵機が有効射程距離に入るやすぐさま中隊長より、「目標、敵編隊の先頭機」の指示により、中隊長の指揮台に設置された算定具が作動し始めた。

敵機は前面より上昇してくる。敵機を狙い易い六十度の角度に入ったときである。

「発射」

と、中隊長の命令が拡声機よりながれるやいなや、六門一斉に火を吹いた。

しかし、中々命中しない。敵B 29は、京浜工業地帯の軍需工場を目標としているらしい。品川方面に飛行している。砲をその方向に九十度旋回すると、爆弾と焼夷弾が投下され、黒煙があ

がり、燃えさかろうとしている。

中隊長は、たまりかねて射撃を中止させ、兵隊を、敵機からの攻撃を避けるために築造された砲を囲む掩壕の上にあがらせ、火の手があがる品川方面を指差し、「あれを見よ、悔しくないか」

と、怒鳴りつけた。

しかし、始めての砲撃は中々命中しなかった。

我われが布陣する十号陣地上空には、東京航空隊の戦闘機数十機がB 29の回りに群り、機銃掃射を加えているようであるが、B 29は平然と飛行を続けている。

時折り、日本の戦闘機が雀が鷲に立ち向かうように体当たりを敢行するが、急所に当たらず、日本軍機は墜落し、搭乗員は落下傘で降下した。

どの位時間が経過したのであろうか……爆撃が終え、日本から離脱のために房総半島方面に東京湾を編隊を組まず個々に飛行するB 29に向かい砲撃を加えた。高度約九千メートル。

B 29の両翼は、胴体からすつとび火を吹きながら落

下尾翼はちぎれ千メートル先の東京湾の海中に没した。

折口中隊長は、「よし、その調子で撃て！」と、声をかけてきた。

中鉢分隊長は、「その照準の感触を忘れず照準しろ」

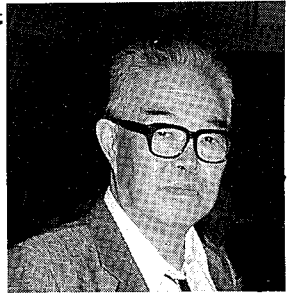
と怒鳴った。中鉢軍曹は下士官候補者志願で任官した、中隊の将校・下士官でただ一人生えぬきの高射砲隊出身者だった。

続けざま、もう一機撃墜した。計二機の撃墜である。我われは場馴れしたため照準が正確になったからである。照準計器の指針を0に合わせる微妙なコツを覚えたからである。

そのうち、特攻機の体当たりにより火をふいて、のろろ、お台場上空を低空でB 29が飛行している。我われ第四中隊の六門は、一斉に集中攻撃を浴びせた。

敵機は空中分解せず、そのまま陣地より千メートル先の浅瀬に突っ込み、尾翼だけを海面に出していた。その残骸は終戦迄そのままだった。今考えれば、砲撃を浴びせなくても、墜落は時間の問題であつたろう、と思

(続)



八十七年ぶりのお礼

露国・日露の役俘虜のこと

前編(四)

文と絵

隠岐威重

弔 辞

嗚呼、我等が永年の親しき友

隠岐威重君の靈に此の様な言葉を告げようとは、今日が今日まで思いもかけない事であった。

あまりにも急な、帰らぬはるかな俄かな旅立ちに告げるべき言葉もない。

君とは、関東大震災の翌年、小田原第一尋常高等小学校へ入学し、机を並べて、ハナ、ハト、マメ、マスを学んで以来の仲であった。上流家庭の君は、当時少数の幼稚園出身で、教室の内外で私たちをリードして居た。

日露戦争の將軍を祖父に持ち、両親の慈愛のもと、お二人の才媛の姉君にもめぐまれ、知慧は進み、あたりを見る目は既にシニカルの風をそなえ、我等を少々手こずらすお坊ちゃんとして人望を集めた。

県立小田原中学校に進んで其の才に磨きをかけ、卒業後は早稲田大学理工学部電気科に学んだ。サイエンスの無味乾燥にあきたらないのか、其頃、君はミュージズの神に氣を移し、文学に絵画に精進した。

私は、君に勧めて作画を横浜美術展に出品させた所、初めてなのに入選し、受賞の快挙を果たした。大学卒業後は、新天地を大陸に求めて満鐵に奉職し、撫順炭砒に技師として活躍した。

其頃、良縁を得て新婚の楽しい一時もあったが、二十年、現地召集で軍務に服するや、たちまち、かの敗戦で苦難をなめ、混乱の中で君は、中国軍の信頼を得て、撫順炭砒を壊滅の危機から救い、塗炭のくるしみの中でよく其の任を全うした。

両三年して現地の感謝を受けて胡盧島より無事故国へ帰還した。

其後は一時教職に転じ城内高校で教鞭を取っていたがやがて国際電氣に職を得、その才能を縦横に發揮して人事部長に進み、人材発掘に力を尽くし、同社発展の基礎を築き、其の任を終えるや、秋田の系列会社に移って重役となり、四年程して其の職を辞した。

筆者の隠岐威重氏は、去る一月十八日急逝された。いい人を亡くした、と多くの人から惜しまれた。葬儀当日、中学の同窓から寄せられた弔辞は、切々たる愛惜の情が込められ、人の心をうつものがある。それは、大正・昭和の動乱を生きぬいてきた男のロマンを秘めた氏の生きざまに対する大いなる共感であり、また、隣人に友人に暖かい気持で接してきた氏の人柄に対する敬愛でもある。よって、その弔辞を通じて故人の歩んできた道と、その人となりを留めておきたい。なお、本稿は完結までいただいているので、連載を続けます。

ピョートル(一)

本題に入る前にもう少しピョートルの出生、性格にふれよう。

ピョートルの父アレクセイ(六聖王)は次妻を指名せずに逝った。彼は二人の妻を持っていた。先妻は子沢山だったが、後継に目された二人の息子は病弱だった。

後妻の子として至って健康なピョートルが生まれた。次子の指名がなく、先後二系の家族郎党はお定まり

の血で血を洗う争いをした。暴徒に囲まれた元老院は止むを得ず二帝並立と云う窮余の策をとった。先妻の子イヴァンを第一帝に、ピョートルを次帝とした。

それが争いに油を注いだ。第一帝のイヴァンの姉がやり手すぎ、策を弄し、病弱な第一帝を仮面として自身の権威、勢力拡張のため親衛隊の武力まで利用した。多数の血の犠牲者を生むが、一時それが成功を得、おとなしい後妻、ピョートルの母を農村の修道院に押し込

姉のソフィアの悪謀みの源の銃兵隊員もピョートルの健全な勇気を認めその力に魅せられ遂に彼の側に転じた。ソフィアは無力になり逆に彼女が修道院に押し込められた。

ピョートルは兄のイヴァン五世と和解した、病弱な第一帝は間もなく没し、やっとピョートルの世になった。前帝アレクセイの時代も露国の内外は荒々しかった。ロシア正教会の分裂、ステンカラージンの率いるコサックの反乱、対トルコ、対ポー

ランド、対スエーデンの戦いの連続であった。

ピ帝の代になっても、近隣諸国との争い、その同盟の、敵対の相手は変わっても、その実態は大きく変わらなかった。

前にピ帝の性格、心情を語ったが、彼の真摯な精神、ひた向きに前進する気性、それはやや手当り次第な無謀にも見えたが、それも彼の体力、気力で押し進めていった。

その例として、この大陸国ロシアに初めて造船、造船をてがけ、海軍を創り、海上進出の道を開いた。造船に当たっては自身先進国オランダに行き皇帝の姿を隠して一工員になり手を汚して技術を修めた。それだけではない、火薬の、大砲の、造機の大小様々な先進技術を手当り次第に修めた。不足の部分は、先進の国々に技術者を求め、自国に招き、その指導の下に国力を蓄えていった。

ピ帝時代も父の先帝の時と変わらず他国との争いは絶えなかった。特に前記のスエーデン国カール十二世との死闘は激しかった。

トルコ帝国との死闘も激

しかった。

トルコ帝国との黒海、コンスタンチノール近傍の争いも絶えなかった。が幸いにも、口国に有利な三十年間の平和条約を結んだ。そしてこの期にポーランド、デンマークと同盟を結びスエーデンとの戦いに入った。

初戦は連合国側の足並みの乱れもあり、連続敗戦を喫し、欧州諸国の物笑いになったがピョートルは屈せず戦意を燃やしていった。ス帝カール十二世は軍の先頭、先陣に立ち中部ヨーロッパ・近東に勝ち、中部口国のウクライナを制し、余勢を駆って国都モスクワを落そうとした。が、連敗を続けた口軍に幸いの女神が微笑んだ。史上第一回目の冬將軍の来援である。(二回目はナポレオンの、三回目はナチス・ヒット

ラーの失敗) ピョートルは冬將軍に救われた。最後の大勝利を得て外患を退けたのだ。



欧州東方の田舎国ロシアに対して懸絶した技術・戦力を持ったスエーデンは降った。そして、その優秀な技術力を持ったスエーデン人の捕虜を多く獲得、奴隷として欧露は勿論遠くシベリア・カムチャツカまで送った。その地の果てのカムチャ

悠々自適の身となって久しぶりに小田原に腰を据えた君は、生来の才能を故郷のおだやかな風光の中で、存分にはたかせる身と成った。狩猟で山野をめぐり、また相模の灘で太公望の日々を楽しんだ。かたわら南町の自治会長として地域に奉仕する中で、満鐵終焉の始終を、運宮の衝にあたったエンジニアの目で活字にして大冊『特異点』を刊行し、好評をばくした。更に、小田原史談会会報に小田原の近代秘史を題材に好エッセイを発表して喜ばれ、続いての健筆を待望させた。絵の方は天性の豊かな色彩感をキャンバス狭しと豪放なタッチでカムバックし、昨年は同好の士とシルバー展を開催して世に問い、「隠岐甦る」と今後の展開に期待を持たせて我等を喜ばせた。然るに、忽ち訃報に接して、悲しみの淵に沈めたのは何と云う運命のいたずらであらうか。奥様始めご遺族の悲嘆はもとより、君逝いて我等の身辺とみに寂漠たるを、いかんともしがたい。残念の一言のほかない。人の世は過ぎてみると短い。一場の夢か。君やすらかに眠れと祈るばかりである。

平成五年一月二十日

県立小田原中学校第三十回卒業「山嶺会」

代表 内田四方蔵

野村鐵太郎

ツカで船を造らせ大洋に出る計画も建てた。この事は日本にとって将来大きな影響を齎すことになる。また、奴隷・捕虜として移されたスエーデン人は、その後どうなった事か。当時としては帰国の術はなかった。時としては帰国の術はなかった。たろう、住み付き、その地の土と化し、一部の血は混じって現在の住民の中に流れていることだろう。

捕虜を奴隷と見做し、売り、極地の僻地に送りその



材木屋綺談 その九

たかた・きくせん

の榎はヒヨロヒヨロ三十メートルもあろうかと思う程丈高く、遠くの方

地を開く、また地付きの農民は農奴として、その首領の所有物の一つとして数える風習は古く欧州にあるとも聞くが、それを鮮やかに実現し、実行したのは、南北米国の開拓の歴史の他では、この北の国に多くあった事を明記すべきだ。捕われた敗者、弱者を勝者が酷使する風を当然とする思考角度がこの国に根強く凍み

いま小田原市松原(現浜町四丁目)には江戸口見付一里塚の史蹟が保存されている。一里塚は道路より少

ついでいるのだ。ハルビンの街はスガリ河畔の網干し場に百年ばかり昔に造り出されたとか聞くが、老人が遊んだ頃には立派に成熟した姿になっていた。また、大連の港を取り巻く露人が造った赤煉瓦の館。その内部に入ると、壁の厚さは一メートルにも達し、天井は二階建ての空間を持つ

からもその姿を見ることが出来た。江戸初期に東海道が整備されたとき、幕府は宿場制度を新設し、そこに江戸日本橋からの里程を記した塚を作った。これが一里塚である。小田原宿江戸口見付

江戸口見付一里塚の

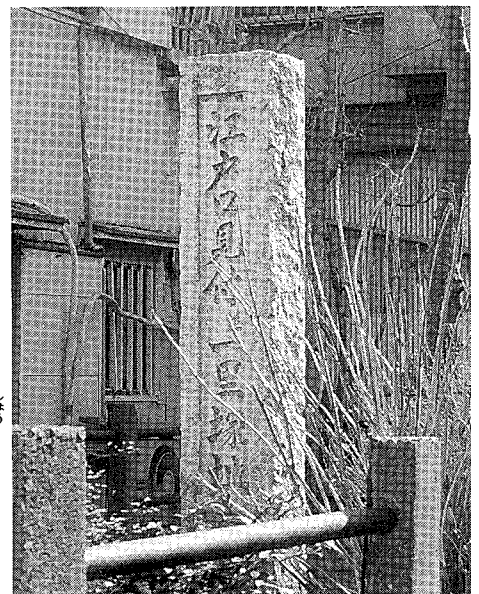
大榎を切り倒す

の標識には江戸より二十里(八〇キロ)と記されていた。そしてこの一里塚にはどこの一里塚にも榎の樹が植えられたと言う。榎は喬木で遠くからも目印しになり、かつ枝を上げた日影は旅人の憩いの場所になったと言つ

ていた。冬の暖房費は大変だろうなと陰口を叩きながら、日本人の細々した構想からは二倍もある設計に驚いた。露助と云う奴らはスゴイ奴等だ。我々の感覚の倍もある太い肝を持った奴等だ、と。(続)

小田原宿江戸口見付一里塚の榎もなるほど何処からでも遠望出来たものである。しかし残念ながら私が目にしたこの榎は、枝をほとんど伐り落とされていて、まるで出来ない鉛筆が立っているような姿が哀れであった。おそらく近隣の人々にとつて大きな枝は危険でもあり、落葉が迷惑なので枝を落とすにちがいない。

さてこの一里塚の榎を材木屋である私に伐り倒してくれとの依頼があった。根元が腐ってきて何時倒れるか危険だとの理由である。何しろ人家密集地の中に立つ大樹なので、これを伐り倒すには大へん苦勞した。



平成5年撮影

上部の方から少しづつ、切断してロープで吊り落とすといういわゆる吊し伐りの方法でやつと倒すことが出来た。近隣の家にも被害を与えずひと安心した。

危険木なので格安に買ったが、今まで榎の樹を扱ったことがない。ある人はあんなものは用材にならないと言う。なるほど私も榎の柱や板を見たことがない。その榎を製材してみると、木肌に粘りが多く、とても建築用材にはなりそうもない。そこで木工用にと得意先に話しても買手がつかない。板に挽いてみると上下から「干割」は生ずるし、数日するとねじくれて何ともならない。それでは平積みにして雨をかけたらずし

は「性」が失くなるだろうと、梅雨に一ヶ月そうしてみた。ところが取り出してみると半分はカビがびっしりと生えて腐ってしまった、とうとう売り物にならなくなってしまった。

始末に困ったこの榎材は薪にしたが火力が弱く、これも利用価値がない。私是一文にもならなかったこの榎の一枚を自分で削って家屋の棚板にしてみたが、余り美麗でもなく、毎日見上げるたびに、あの一里塚に聳えていた雄姿を思い出し、英雄の末路の哀れを身に泌みて感じたものである。これは昭和十一年(二三)、日中戦争が勃発した頃の話である。

明治の風流人

横山清男の旅日記

『熱海の藻屑』(一)

佐久間 俊治

はじめに

『熱海の藻屑』は、横山清男が明治三十一年(八六)四月、東京から熱海へ旅した折りの紀行文で、水荃の跡も美しく、歌をよみこみ、随所に彩色の絵を挿入した、A5判大にやや近い大きさの私家本である。

その文中に「予は今年(明治三十一年)還暦なれば」とあるところをみると、氏の生まれは天保十年(二六)頃かと思われる。また、自身が残した記録によると、高知県土佐郡初月村(現高知市西北部の一部)の出で、氏は長男だが別家を起し、本家は、次男祐之氏が継ぎ、現当主は、その長男鉄樹氏で、住所は高知市江之口村(別註1参照)となっている。なお、横山家は、いろいろなことから推測するに、郷土の出で、かつて長宗我部氏に仕えたのではないかとされる。

横山清男の職業は、曾孫吉松信彦氏が、その叔父の一人にたずねたところでは、「絵画き」であり、「かえろ」の絵をよく画いた。また、「へび」も画いた」とのことであったという。これで見事な挿絵の謎もとけたし、文中に何度か出てくる「蝦蟇の絵」のことも分かった。

この筆マメな風流人横山清男が残した、その文には、何箇所か読めないところも残ったが、全体として面白く、何よりも明治三十年代前半の時代が生きいきと伝わってくる感じがして、敢えてご紹介する次第である。

(本文)

今年明治三十一年(八六)四月十八日、¹寿衛子をつれて伊豆の国熱

海にもものせん(行ってやろう)とて旅の装いす。
註【寿衛子】横山清男氏の長男稜威磨(別註1参照)の妻。なお

凡例

- 1 意味のわかりにくい部分は、意味・意訳を記した。
- 2 簡単な説明は、該当語のすぐ下に(××××)のように註を加えた。
- 3 少し長くなる説明は、該当語の次または別の箇所それぞれ註を加えた。
- 4 本文のみでは意味や、前後関係がわかりにくい部分には「」内に補足をした。
- 5 引用符、句読点も適当に補い、また、漢字、かなづかい、送りがななども、意味をとりやすいように適当にあらためた。

清男氏は、女性名には下に「子」

を加えて記しておられるので「たとえば妻以努は「以努子」のように「本名は寿衛であらう」。

折ふし、岡本徳次郎、重信喜太郎来りて、「小金井の桜、今を盛りなり」とものかたりしけるに、予は年々かしこに杖を引かんもの(毎年あそこに行ってみよう)とこころざし、その頃にいたれば浮世のちりにはだされて(世の中の雑事に邪魔されて)、果さざりしを、今年こそ待ちに待ちたる甲斐なく、また止みぬもほいなし(残念だ)。

。口惜しやさかりの花を見もやらで人づてにきく小金井の里

この歌、旅路より楠衛子(横山清男氏の姪、クスエ(コ)と読むのか)に送りたれば、返しとて(返歌として)

。われこそは行きて見れば聞きしにもまさりて花の小金井の里

とぞ。

とかくするうち空くもり小雨降り出だしたれば、しばしたゆたい(ためらい)、やや晴れたればやがて車(人力車と思われる)に乗りて番町(東京都千代田区)のやどり(仮住まい)を立ち出ずる。時は正午過ぎる頃なりけり。霞ヶ関、内幸町、行く手の桜宵の雨にあればただおしげもなく散りぬるぞものうし(いやなことだ)。

。吹く風に霞ヶ関もどめ得ず(霞ヶ関を関所になぞられて)越えて散り行くやまざくら花

。楽しくも待ちしにかえて桜ばな散るとし(時候)見ればものうかりけり

。わずかなる盛りを雨やあらしにもやがて散りしく花のしら雲
この三首の歌もおなじく楠衛子が返しとて

。あだ(無益)に吹く風し(さえ)なければ花霞せきとめてだに散らさじものを

。たのしきもうきもこえての人
ごころ花をめでぬるあまりなる
らん
。さらでたに(そうでなくても)
やがて散り行くひとさかり雨や
あらしの花ふぶきとは

とぞ。

新橋停車場に至りてしばしやすら
ううち、汽車の出ずるよし(という
ことだ)。赤き帽をきたる男の子
(「赤帽」^{あかぼう}。駅構内で旅客の荷物を運
ぶのを業とする人)にうながされて
切符をあがない(買い)汽車に乗る。
午後一時四十分、笛とともに煙をは
きて行く道すがら窓より左、右を見
れば、あわれ花は今年の別れなりけ
り。

。さらでだにわずらうときをふ
る雨に はやくも花はやつれぬ
るかな
(印の言葉に意味のつながり)

。宵の雨はれしもさえて吹く風
に花のふぶきとなりかわりぬる

御殿山、品川、大森もあとにして、
川崎のほとりを過ぎるころ、そこは
か(あちこち)とわずかに花にとど
めし葉桜と緋桃のまじわりて咲ける
もまたおかし。

。しら雲と見えし桜はうすみど
りかえりて(それに対して)桃
の花はくれない

また野辺の見わたし菜の花の咲け
るを見て、

。片里も富たる(辺鄙^{へんぱ}な里にも豊
かな)春は見えにけりこがねの
色にさけるの花

横浜伊勢山の桜は、なかは今を盛
りに見えていとめでたし。

。桜花おくれ先たつ(遅咲き早
咲き)いろいろに春のにしきと
見ゆる伊勢山

大船にいたりて汽車を乗りかえて

。大船のゆた(大きな船のゆった
り)にもあらず乗りかえて別れ
をいそぐ黒がねの道

。くろがねの道ひらきてはやい
がまのながまもいらぬかまくら
の里 (別註2)

横須賀本町三富屋につき、もの

(荷物)を預けて車に乗り波止場に行
きて小船に乗りたる折ふし乾(北西)
のかた赤黒き雲の立ちたる中に、こ
がねいろなる光りさすよと見るほど
もなくにわか風吹き来たり波あら
あらしく立ちければ、舟子(船乗り)
はかるうじてやうやうに富士軍艦の
梯子の元にいたりしも、さきにつな
ぎありし船二艘、予が乗りたるより
大いなるが、そのかたえ(片側)に
こぎいれたれば、浪のまにまに高く

低くあげおろしつつ、船と船とにふ
れてくだけのなみは、予が船の中に
うちこみ、かなたの船のこべりとい
う所にて(向うの船の側面で)こなた

の舟のへさきを押し今やくつがえ
りなんかとおもうばかりになりぬれ
ば、女、翁のいかで梯子にとりつく
べうもなく(とりつくことができずは
ずもなく)はるかに空をあおぎ見て
もいづまろ(稜威磨氏。著者の長男で、
この軍艦に乗っているはずの海軍軍人・
別註1参照)もいでざれば、舟をか
えせもどせといくたびか大声あげて
舟子をのしりたるを耳にもいれず、
おのれし口にめをつけて陸にかえら
ん人を四人りばかりともの二つ三つ
積み入れぬ。水兵一人ありて「大丈
夫なり、安心せられよ」とて舟子
をはげまし力をきわめて舟を返し元
の波止場につき、はじめてよみがえ
りたるこちし、三富屋に入れて
(入って)文(手紙)したため、いづ
まろに送りてよめるうた

。あおぎ見る富士の艦までこぎ
行きてよるべもなみに(波にさ
えぎられてたよるものもなく)立
ちかえりけり

寿衛子もとりあえず

。あいみんとこがるる舟をへだ
てつつよるべもなみの(たよる
ものもない、その波の)うらめし
き哉

「旅館の中で」障子の外面に「ど
こか」といいて隣座敷に入り、酒く
みかわしものがたりしつつ笑いつす

「一団がある」。これなんいづまろの
声によく似たりければ、はした女
(女中)をして「吉松にあらざや」と
問わせけるを「あなたはまたいかな
る人か」といいおこせられた(言っ
てよこしたので)「吉松の父なり」と

いいやりしに、その後のこと聞きわ
きがたきも(聞きとれないが)、なお
その声はしてありければ、いく度か
耳をそばだて、あるは(あるいは)
かなたに出で行くなど、寿衛子とか
わがるがわるかいまみたるに(のぞき
見ているうちに)はては(とうとう)
その人の顔を見るまでになりゆけば、
こはいかに、八文字の口髭はえし男
の子なりけることおかし。

同十九日、とく(はやく)おき出
でて見れば空晴れ海原静かに見えわ
たりけり。されば今日こそと富士艦
にゆく装いしける折ふし、宵の文
(昨夜送った手紙)にていづまろ来り
ぬれば、ともしもこのやどりを立ち
出でて車に乗りて、停車場前にも
を預け、小舟に乗りうつり、とく富
士艦に上りて、坂本少佐、中川中尉、
横山中尉、その他岡田、中島等にあ
い、また華頂宮殿下(別註3)を拜

せり、それより艦の内を見廻りに、
その大なる、その美麗なる、その堅
牢なることごとものもの、ただおど
ろくの外なかりけり。

。名にしおうやまとのふじのい
くさ船雲の高峯とおもうばかり
に
この歌を楠衛子に送りたれば返して

。たぐいなき名におうふじのい
くさ船(富士という比類ない名の
軍艦に乗るのは) たかねにのぼる
こちなるらん

とぞいいおこせける。

もの預けありし家にかえりていつ
まろともども汽車の出する時を待つ。
いづまろは明日横浜へ行きてその翌
日神戸、徳島を経て高知等へ廻航す
るよしなれば、古里(高知)に言伝
てす。午前十時、この家の女に送ら
れて汽車に乗る。やがて笛の響きと
ともに行き、いづまろさらばとて別

れぬ。汽車はとくはせて(速く走っ
て)大船につく。東海道の汽車にう
つりて、藤沢、平塚、大磯を過ぐ。
このわたり(あたり)なべて(二面に)
松原或はみどりなす木々の中に桜の
ひと本ふた本の見えければ、

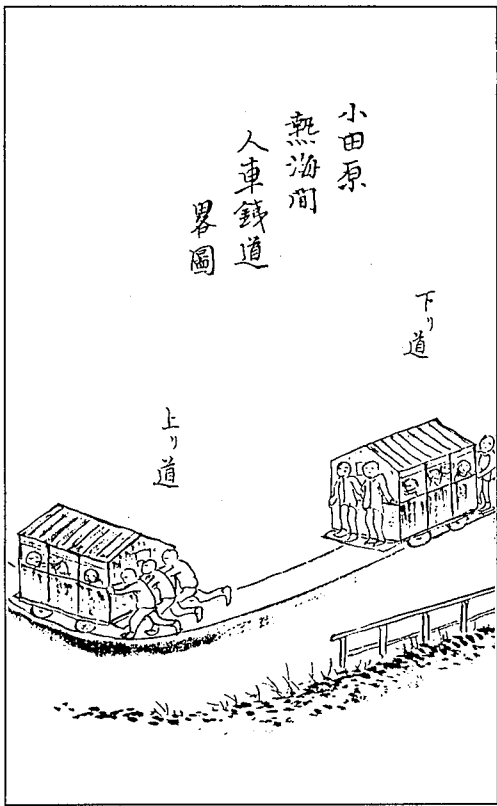
。大かたのみどりとなりて磯山
は、わずかに残す花のおもかげ

寿衛子もまた

。磯山に咲きし桜も今ははやみ
だれてぞ散る花のしら浪

右二首の歌もまた楠衛子が返しとて

。磯山ははつる(終りとなる)
なるらん散りのこる都の花もみ
どりまじりに



汽車は はや国府津につく、馬車
(国府津小田原間の馬車鉄道 別註4)
にうつれば、思いきや、久しく会わ
ざりし片岡恒次郎と乗り合わせて、
ともどもむかしがたりして並松の中
を行く。(統)

別註1 吉松稜威イサカ

明治三年(一八七〇)土佐郡江ノ口村(現在

高知市の一部 江ノ口川と久万川にはさ
まれた、市街地の北半分)に生る。この
紀行文の著者横山清男氏の長男で、母以
努の実家吉松家の養子となった。

同二十五年七月 海軍兵学校卒業

同二十七年七月 日清交渉(少尉候補

生)

同年八月 日清戦争従軍

同三十一年三月 寿衛と結婚

同三十三年八月 海軍兵学校機関術教
官

同三十三年十月 合議離婚 同十二月
辰誉と結婚。この紀行文は、稜威磨・
辰誉の長男・須賀根氏が所持していた
ものである。

同三十七年 日露戦争従軍

大正四年(一九一五)十二月予備役。『日
清戦争従軍記』、『日露戦争従軍記』な
どの手記を残している。

昭和十七年(一九四二)没、海軍大佐。

別註2 黒がね

黒がねは鉄の古名。鉄道(横須賀線)
と軍港に停泊する甲鉄艦(軍艦)に両方
にかけている。くろがねの道ひらきては

鉄道が開通してからはの意。軍の要請に
より明治二十二年(一八九九)六月十五日横
須賀線(大船・横須賀間)が開通、東海
道線と接続。やいがまのとがま 道をつ
くるためのよく切れる鎌の意。

別註3 華頂宮殿下ニハナミヤノミヤノミマ

博恭親王。明治八年(一八七五)生。海軍
兵学校を卒業後、明治二十六年(一九〇三)
ドイツ海軍大学を了り、当時、富士艦分
隊長であった。後には伏見宮に復帰。

別註4 馬車鉄道

明治十五年(一八八〇)に、東京市街鉄道
馬車が、新橋・日本橋間に開通したのが
最初で、二頭立ての馬が軌道の上を行く
ので、当時の乗合馬車などにくらべては
なほだ快適とされた(平凡社・『大百科
辞典』)。

明治二十年(一八八七)、小田原の有志吉
田義方等七人が発起人となり、国府津・
湯本間の馬車鉄道敷設を請願、翌二十一

年二月、免許と同時に、小田原馬車鉄道
株式会社が設立され、本社が幸町一丁目
に置かれた。同二十一年十月開業したが
区間は国府津駅前から湯本旭橋手前広場
までの十二・九キロメートルであった。

国府津・小田原間は所要時間三十分で運
賃は下等で六匁、小田原(幸町本社前)・
湯本間は三十五分で 八匁であった。

馬車業者や人力車夫等の反対を克服し
ながら発展したが飼料代の問題、馬の病
気等もあり、早くから電化への努力が続
けられ、明治三十三年(一九〇〇)には、電

車に道を譲ることとなった(箱根登山鉄道
株式会社・『箱根登山鉄道のあゆみ』)。

古文書講座 3

離縁状は再婚許可証文

内田 清

江戸時代も熟談離婚か

従来の教科書では、江戸時代の離婚を「嫁は夫や親の気に入らなければ、簡単に離婚された(追出し離婚)。

しかし嫁は夫からどんなにひどいことをされても、自分から離婚を求めること(飛出し離婚)はほとんど出来なかった。」と「夫専権離婚説」を採っていたが、離婚状の数量的研究が進み「熟談離婚説」が注目されている。(高木侃著『三くだり半』平凡社参照)

今回は離婚状を主に飛出し離婚に触れてみたい。離婚状は再婚の証明書

江戸幕府の「公事方御定書」は離婚状を渡さないで再婚した男は追放、離婚状を取らないで再婚した女は髪を剃る、親などは罰金という罰を定めている。従って「返り一札」とい

理由曖昧のが良いのだ。

受取人と三くだり半

文書の差出人、合川屋は夫であるが、受取人原源右衛門は、おあささんとの関係が不明である。養父等の親族か、主人や仲人等の関係者なのかは、関連史料と照合しないと断定できない。このように受取人が妻以外の名だけの離婚状が約二割有るそうである。

また、「如件」は中国伝来の「三下り半」の慣習にそって引き伸ばしてある。明治五年(一八七三)から離婚が戸籍登記となり、離婚状の法的根拠はなくなった。そめは飛出し離婚に成功

その理由を述べている。共に折り合いが悪い(不熟)という当地に多い離婚理由である。が一般には勝手ニ付き」や理由欠落が多い。これが夫の勝手気侷(自由)離婚説の根拠でもあるが、逆に「妻に責任がない」として丸く納める配慮だ、妻の姦通などが有っても、具体的理由を書かなかつたというのが実際のらしい。後半の②は再婚の自由を保障している。この点でも

一札

一今般於あさ義、私共不熟ニ付不縁仕候。此後、何方成共御遣被成候共、一切相構不申候。仍後証如件。

明治四年辛未年 二月四日

原源右衛門

原正氏蔵

一札

一今般於あさ義、私共不熟ニ付不縁仕候。此後、何方成共御遣被成候共、一切相構不申候。仍後証如件。

明治四年辛未年

二月四日

合川屋

庄右エ門

原源右衛門様

り寺に駆け込まないでも簡便に離婚を勝ち取ったらしい。

注意して欲しい語句

於(お)あさ。当地では戦前まで女の名におをつけて呼んでいた。於は万葉がな。

不熟ニ付ふじゅくにつき。未熟なので、和合しないので、不和なので。

相構不申候 あいかまいもうさずさうろう。差し支えない、指しさわることはしません。相は語調を整える接頭語。不申候は慣用語。解読力は筆の運びどおりなぞって字形を記憶、転用しながらつく。

何方いずかた。いずれのかた、どちら。解読では起筆と筆の運びの把握が決め手。

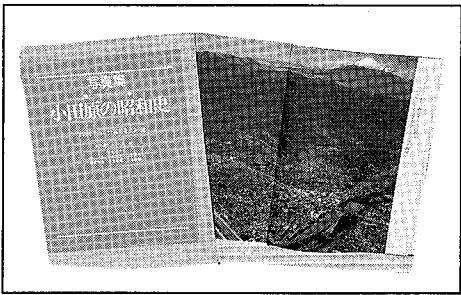
小田原市役所、小田原市農業協同組合、小田原商工会議所をはじめ各団体、個

新刊紹介

写真集 小田原の昭和史

昨年、小田原図書館から写真集『近代小田原の光と影』が発行されたばかりなので、本書の企画を耳にしたとき、どのような形で世に問われるか関心がよせられたが、本書を手にしたとき、それは杞憂に過ぎなかった。

人から提供を受けた写真には目新しいものが多く、また、その編集もすぐれ、戦中、戦後の昭和の時代をよく際立たせている。



郷土誌目次紹介

◇おたわら

Ⅱ歴史と文化Ⅱ

小田原市役所市史編纂室編

小田原市教養二〇〇番地

電話室(三)二七〇

第六号 93・1

A5四頁 二〇〇円

〔論文〕

坂口安吾と小田原

稲葉氏小田藩における財政

庄迫要因―軍役負担を中心として―

アジア太平洋戦争末期の町

監修者・編集者次の通り。

〔監修〕高田喜久三・内田清

〔編集委員〕井上弘・岩崎敦吉・

二宮龍也・松尾和俊・守屋康

博・山本勝昭 千秋社刊 A4

判一九四頁 価八九〇〇円

神奈川教育史の源流を探る

神奈川の寺子屋地図

著者 高田稔

著者には「小田原地方の寺子屋―足柄地方庶民教育動向―」と題して、本誌第一三〇号(昭和六十二年九月発行)と第一三四号(同六

十三年十月発行)に四回に

内会・隣組 井上 清

近世遍歴民の世界

―小田原藩領下の民間宗教者をめぐって―

西海賢二

〔史料紹介〕

「幼童抄」紙 黒田基樹

背文書につ 森 幸夫

山口 博

〔調査報告〕

真宗村落の講集団―小田原新屋を中心として―

谷口 貢

〔市史の広場〕

自己覚醒の系譜―北村透

谷から民衆詩運動へ―

福田美鈴

戦時下における文学運動

相澤栄一

白秋と「木鬼の家」

湯浅 浩

北条家評定衆「山中康豊」

について 黒田基樹

関東大震災以降の小田原

町の社会事業について

―資料紹介―星野和子

小田原市の仏像調査

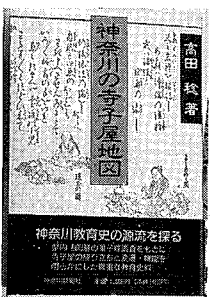
清水眞澄

〔書評〕

明治の小田原―市史史料編近代Iをよむ 樋口雄一

わたり連載させて頂いたが、その後も調査研究を続けられ、県内の約千六百余の寺院墓地や共同墓地、個人墓地、それに神社境内寺を巡検され、六百六十ほどの筆子塚を確認。これと他に、文献資料による数値とを併せ現時点での県内の寺子屋総数は千百十八、師匠数(累代を含む)は千四百三十一に及ぶと発表されている。

同書は、第一部「寺子屋の成立」を、1江戸時代の識字力、2寺子屋の開業、3師匠の身分、4地域と寺子屋―師匠点描、5束脩(入学金)・謝儀、6往来物授業風景に分けて構成。第二部では「寺子屋師匠一覽」として、県下市町別に所在地、開業、廃業、生徒数、身分、師匠氏名や、備考として、略歴、出典などを記述。文字通りの労作で貴重な資料となっている。B6判 三五〇頁 かなしん出版発行 価一五〇〇円



弓削道鏡と

千代観音屋敷

富田千春

千代には、弓削道鏡と関係深い観音屋敷という所がある。飯泉観音は、千代から移転されたものであり、色々の言い伝え、参考資料等を調べまてみた。

一 弓削道鏡の略歴

道鏡は八世紀初め、河内国(大阪府)の弓削郷の有力豪族、弓削氏に生まれたとも、貧しい弓づくりの家に生まれたとも、天智天皇の孫との皇胤説もあるが不明の点も多い。

八世紀前半は、奈良平城

飯泉観音の十一面観音立像(真指定文化財)



京は咲く花のように壮麗な都で、青年時代をそうした都に近い河内で過ごした。時代は聖武天皇、全国に国分寺建立の詔が出され、大寺大佛建立の詔が出され、仏教のすぐれた現世利益、僧侶の優遇、そうした花道に道鏡は登場した。東大寺の別当義淵僧止のもとで学問をばげみ、葛城山にこもって山林修行をして、異常な治療能力を獲得したといわれた。

の天皇に即位される。九年後(七五七)、淳仁天皇に讓位、孝謙上皇となり、近江保良京行幸のとき、上皇の病に道鏡が侍した。上皇、天皇と不和となり、奈良平城にかえり、「法により平癒して歎喜した上皇は大菩提心を発し」法華寺に入って尼となり法基と号す。翌年道鏡は少僧都に、次年大臣禪師となる。

野国薬師寺別当に左遷

された。

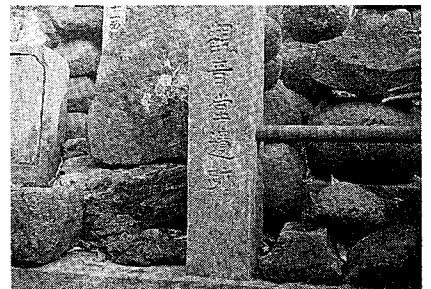
二 百里の旅路

道鏡は時めく法王の顕座も今は夢、住みなれた京を後に、老の肩に笈を負い、よろめく腰をいたわりながら、自分の足で秋風の吹く山野を下野へと下った。その時代、東海道を通るには、伊賀路をたどり尾張、三河、遠江、駿河、そして箱根の嶮を越えなければならなかった。

道鏡の莊園が、鴨宮にあるとか、相模の地が食封の地とか言われてきたが、長い旅路の末、足柄箱根の大山脈を西の方から越え、広くひろがる足柄平野、相模灘を眺めた時、ほっと安堵する気持ちと旅の疲れも一度に出たのであろう。

千代台の飯泉観音堂蹟については『新編相模国風土記稿』には次のように書かれている。

大乘院の傍に在り、飯泉観音堂元地にして字観音屋敷という。近隣陸田の字に、彌勒畑、八幡畑、堂の脇、塔ノ腰、堂ノ後、等皆当時の遺名なり、弓削道鏡、下野国へ謫せら



千代 観音堂遺跡

れる時、東海の駅路を経て、千代の里に至り笈佛の観音にわかに重くなりて進まず、村の老若渴仰して、手に手に竹木を運びて草堂を営み当村に安ぜり、飯泉に地に転ぜしは、天長七年なりと見ゆ、按ずるに村名の條に注記する曆応四年の文書に、千葉郷内観音兒と見ゆれば曆応の頃は猶此の地に在りしに似たり云々。

この十一面観音像は、唐国の僧鑑真和尚が我が国に来て、時の天子様孝謙天皇に奉った御木像で、天皇は八年間これを内裏に安置されたが、後之を道鏡に賜った。道鏡は下野国下向の際笈に大事に奉じて来た。

三 千代観音屋敷

道鏡の観音立像と、千代観音屋敷との関係については、前記、風土記の他に、既に六年前千代の台地に弓削寺を創り、甥の弓削広事を差し向け、盛大な落慶法要を行って納めたともいう。

千代台は相模文化の発祥地で、最初の国分寺所在地ともいわれ、国分寺には必ず、八幡宮と観音堂を祭祀する規模であったという。

今の小学校敷地が、千代古屋敷の八幡神社で、菅田別尊の祭神で、東院の本尊に観音をおく慣例で、東院のあった場所が観音屋敷であるという。

昔の道は、人や馬が通るだけで、道幅も五〜六尺位

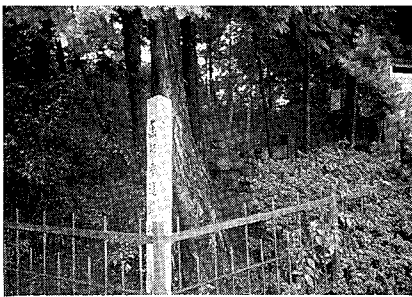
下野・薬師寺



だが、千代小学校旧八幡神社の前から、千代台四方坂を上り、北側を廻って、観音屋敷へ通じる道は、当時から道巾一丈の広い道になっている。この道路は、久野古墳群から千代台を通り、田島横穴古墳への道といい、古代の文化地を思わせる。

今の観音屋敷は佐藤学氏宅で、南西向きの小高い広い宅地で、その周囲には大櫛が数本も繁茂している。家屋の裏庭の竹藪を開墾したらその付近から、五輪塔、宝篋印塔等の古塔数十基が発掘され、家の東側に積み上げて祭ってある。この塔は毎年勝福寺峯師が御供養に見える。周囲から布目古代瓦片も多数出土し、天平時代雷紋鍍瓦も、今勝福寺

道鏡塚



の寺主として保存されている。この祭場を造られたのが、佐藤仲次郎氏で三代前から此処に常住されたという。次代の春敏氏の話では、昔、裏にお堂があったが、乞食が寝泊りするので取り壊したとか、三島神社傍の梅畑から多数の礎石が出て、石垣に使おうとしたが、皆焼石で駄目だという事で割って畑の隅に埋めてしまったとの事、その佐藤さんも三年程前に亡くなられた。

四 飯泉観音

道鏡の建てた千代弓削寺が飯泉へ移されたのは、その後六十年経た天長七年(八三〇)とも、暦応(三三六〜四二)以後ともいわれるが、道鏡の笈十一面観音御丈二尺八寸、赤梅檀御衣木の御本尊は、度重なる震災や火災でなくなり、現在の像は平安時代の地方仏師の作といわれる。

しかし道鏡が下野国へ下る折、箱根の嶮を越え、舟原久野を通り、ようやく池上部落の端、三の森で休息した折、部落の人達が抹茶をすすめたわった縁で、飯泉観音の御開帳には、池上から多数の女子が連れ立つてお茶の奉仕にやってくる。お茶を沸す薪も三の森から枝を切って運ぶという人情話も残っている。

五 下野薬師寺

観音様のお開帳は三十三年目毎との事だが明治二十五年(一九三二)以来途絶え、昭和五十六(一九八二)年十一月、九十年ぶりで、中興千百五十年諸堂復興落慶開帳大法会が行われた。

鑑真和上が勅令により、日本三戒壇の一つ下野薬師寺に戒壇院を建立した当時の大刹である。道鏡が長い旅路の末、ここに着いたのは秋も半ば過ぎであった。幽囚の身、薬師寺の方丈に閉じこもりの毎日が続く、翌年になると心労で衰弱も加わり下野へ流調から一年八カ月、宝龜三年(七三三)四月七日の夕べ、行年六十五歳で、実に波瀾にみちた生涯を閉じた。

六 道鏡のイメージ

道鏡は怪僧、色僧、妖僧という人もある。女帝との愛も醜聞化され、はては巨根説が生まれ、みだらな人間とされて来た。

戦前の教科書では、弓削道鏡を大逆無道とか、極悪人扱いとして書かれている。皇国史観によって被害悪名を受けた人物は数えきれない程である。

戦前、足利尊氏も大逆賊として、えらく評判が悪かったが、一昨年のNHK大河ドラマでは人間的にもすぐれた人物と見直された。昨年八月、木曾義仲復権の記事が新聞に出ていた。「木曾の山ザル」「逆臣」の名誉回復を目指し、諏訪大社で祈願するとの事だ。

当時、高僧雲の如し、道鏡その間に傑出す。学識、教養、誠意、それほどの愚物、悪党ではないと云われる。今、道鏡顕正会、道鏡を守る会、道鏡法師を偲ぶ会、等も広く造られ道鏡を見直そうと、千代へもそうした会の人々が時折訪れて見える。

全般的に「日本史を見なおす」のも大事な面白い事だと思う。(了)

曆のいろいろ

盲目曆 (三)

日本で作られた古曆(一)

泉州曆

泉州信田郷(有名な葛の葉伝説の信田、現大阪府和泉市舞町)から頒布されたもので、岸和田曆・信田曆ともいわれている。泉州曆の起源は定かではないが、南都曆による所が多いようである。延宝七年(一七二七)には既に曆を發行しているが、元來賦曆であるにも拘らず何度も売曆を行った為曆版行為を差止となり、遂には宝曆五年(一七五五)で絶えてしまった。

大坂曆

永禄六年(一五六六)に大坂曆と丹生曆の曆日が相違している事があり、大坂曆が誤っていた為、それ以降頒布する事が差止られた記録がある。従って室町時代から大坂曆が存在していたわけだが、江戸時代には京曆が多く用いられた。

丹生曆

天野宏

伊勢国飯高郡丹生(現三重県多気郡勢和村大字丹生)の賀茂杉大夫の頒布したもので、享禄五年(一五三三)には既にその存在が知られていた。領主伊勢国北畠家の保護を受け、水銀の産地として有名な丹生から發行された。江戸時代から紀州藩領であるので紀州曆とも云われた。丹生曆は後の伊勢曆ににている。それは伊勢曆が丹生曆を模して作られたからである。伊勢曆が普及するに従い丹生曆は次第に影が薄くなった、然し紀州藩が保護したので紀州藩曆として幕末迄永く続いた。現在でも加茂家の跡は、数基の墓石と屋敷跡の石垣と寺に移築された表門が残っている。

江戸時代の曆

江戸時代に入ると徳川幕府の認可を受けて發行されているが、中には薩摩曆の如く遠国の為黙認されたも

のや、藩の実力と曆算者の実力により強行されている曆の刊行もある。伊勢曆・江戸曆・仙台曆・薩摩曆・秋田曆・盛岡曆・月頭曆等を挙げることが出来る。

伊勢曆

江戸時代には曆といえは伊勢曆という位普及されていたのであるが、歴史的には古い曆でなく、伊勢神宮の御師が大森と共に檀那に頒布するようになったのは十五世紀後半で、当初は丹生曆か京曆を持って行ったようである。寛永八年(一六三三)森若太夫が、ついで箕曲基太夫が頒曆と売曆とを刊行したのが伊勢曆の始まりである。この二人は陰陽師であったが、寛永十九年から陰陽師の資格の無い白人(素人)曆師に対して発行が認められるようになった。白人曆師は販売出来ない壇家配りのみの賦曆だけ發行が認められた。御師の頒賦だけでなく伊勢詣での格好の土産として曆が喜ばれて、その發行部数が膨大なものとなり、幕末には約二十万部に達したのである。明治十六年(一八八三)から政府編集の官曆が『神宮曆』として伊勢神宮司庁

から刊行されるようになったのは、このような歴史的事績があったからである。伊勢曆師の数は貞享改曆以後は内宮(宇治)曆師・佐藤伊織、外宮(山田)曆師・飛鳥帯刀、等十五人にきまつていたようである。

江戸曆

江戸初期以後幕府の認可を得て頒布されていたが、他の曆と異なり初めから出版事業として行われていた点に特色がある。江戸曆で特に珍しいのは、表紙に「地震なまず」である。これに「ゆるぐともよもや抜けじと要石(かなめいし)、かしまの神のあらん限りは」と鹿島神宮の要石の歌の載っているものもあり、初めは鹿島曆かと思えたが出版元が江戸の地名であり、また伊勢曆と同形式のものもあり、これも出版元が江戸の地名で伊勢に無いものであったりして江戸に版元のある江戸曆である事が判明した。元禄十年(一六九三)には江戸には二十八人の曆屋があったが、後に十一人に限定された。この数は幕末まで厳守され、それ以外の人には刊行は許可されなかった。

仙台曆

仙台曆は十七世紀後半頃の第一期と、幕末の第二期の二期に分けられる。第一期には延宝四年(一七二六)、貞享四年(一七二七)、正徳二年(一七三三)の刊行が知られているが、正徳五年限りで禁止されている。これは江戸十一人の曆屋の訴訟がからんでいたようである。仙台藩の記録では、幕府の許可を得ないで官歴以外の歴注を記載して發行した為、仙台国府町版木屋九左衛門、同六郎兵衛、本屋次郎兵衛の三人が曆類刊行し諸人信用の曆を違却した罪で牢舎入りの罪にあっている。この後仙台には江戸曆が頒布されているので、江戸曆商人の企みのようにも見える。然し仙台藩では安政元年(一八五〇)に再び幕府の許可を得て仙台曆を刊行しているのである。

薩摩曆

薩摩は源頼朝のころには中央から遠国であるから独自の曆を使用する事が許されていたという。然し現在発見出来るのは寛政・文化・文政の頃以降のものである。当時薩摩曆は領主や重臣の間だけで、一般には伊勢の

曆が使われていたとされている。

秋田曆・盛岡曆

秋田は横手の住人浅野数馬が作曆し、柿崎屋四郎兵衛が出版元になり秋田曆が出されている。嘉永六年(一八三三)・文久四年(一八六四)・元治二年(一八六五)・明治二年(一八六九)の曆が知られている。また盛岡曆は後述する盲曆が出版元である舞田屋から出されている。

弘前曆

寛政八年(一七九六)に創設された弘前藩藩校稽古館が開校以来明治三年まで、毎年作成していた曆がある、これを弘前曆とか稽古曆と呼んでいる。この曆の作成には、幕府の天文方の検閲

を得て、稽古館の数学教官が作曆に当たり、一般には頒布せず藩校の教官や生徒の使用に供されている。

月頭曆

これは月の朔日の干支や主要な曆注を記した曆で、幕府から正式に認められたものではない。

特殊な地方曆

今回の紹介の盲曆(めくらこよみ)が此等に相当する。この記述に際し盲(めくら)と云う語が穩当で無いと云う方もあるが江戸時代の農村には文盲の人が多く、彼等に年中行事の早わかりとして作成された曆で、当時としては切実な要求の曆であったと考えて敢

えて御寛容の程をお願いしたい。然し今では既に絶版となっていて、僅かに盛岡の中儀商店で発行されているものが趣味の民芸品として販売されている。

田山曆

岩手県の北端、二戸郡安代町田山で作られた絵文字の曆である。

橋南谿が『東遊記』に紹介したのが世に知られた初めといわれる。

田山曆の創始者は田山善八と云う人物であると伝えられるが、善八はこの地の庄屋の書き役であり又の名を源右衛門、平泉で寺社の取締役をしていたが貴重品の盗難事件に上司の罪を背負ってこの地に逃れ、身分

古刹秘史 浄永寺

星野幸一

四、学童疎開と片岡先生
私は、浄永寺の檀家ではないが奇縁により戦後、年に四、五回は訪ねている。大分前の話になるが庫裡

の玄関に版画風の富士山を描いた一枚の絵が飾ってあるのに気がついたのである。回を重ねて眺めていると心を魅かれ老夫人に何うと片

岡球子画伯が記念に寄贈されたものだという。恥ずかしいことながら当時の私は画伯の名前を知らなかった。

画伯は、札幌市出身、女子美術専門学校日本画科高等科を大正十五年卒業後昭和三十年まで横浜市立大岡小学校に教員として奉職され、大東亜戦争学童疎開のため児童たちとこの寺に寄宿されたのである。

を隠す為にも善八と変えていたという。彼は文盲の多い山村の人々の便宜の為に曆日教示を目的としてこの絵曆を創案普及した。善八の名は三代位まで世襲されたので善八曆とも云われ、明治初年頃迄発行されていた。善八の子孫である八幡家には、田山曆作成に用いられた木活字類が多数保存されていると云う。田山曆も盛岡盲曆も絵曆の性格が表しているように、年号、月の大小、その年の恵方、忌むべき方角、十二支がまざり目につく。甲子(ねずみ)、庚申(さる)、己巳(蛇)、節分(鬼)、八専(箸一膳)、初午(馬)、彼岸(飛ぶ雁)等が文字と絵の表現の違である。月の大小には、十二箇月を横断しているしめ縄の結び目の位置(田山)、刀の大小を利用(盛岡)している等が有り、日付の表現には和算の算木を使用したのや木樵の材木に使用したの記号から転用したものもある。田山曆は著名な割に実物の残量は少ない。

盛岡曆

田山曆が山村の素朴な少ない曆であるのに比較して、盛岡曆は南部藩の城下町盛

岡で、藩の御用出版商舞田屋から大量に出版された。盛岡絵曆として初代舞田屋理作は田山曆の影響を強く受けていたと考えられるが古い事は明かではない。舞田屋の盛岡めくら曆は美濃版に変化し絵心教も版行している。然し明治三年(一八七〇)には六十数年の華々しい過程に終止符を打ったのである。その後舞田屋版の消滅後は城下にては折柄明治五年の革新的太陽曆への移行もあり、吉田作治、伊東文造等の新曆の絵曆の開版もあった。現在は幾多の屈折を経て昭和二十四年中儀本店(中村謙一氏)が版權の移譲を受け今日に至っている。中儀本店に於る南部めくら曆の研究は先代の中村謙一氏が中心となり、佐藤勝郎氏が協力して、現代に生きるめくら曆として田山めくら曆の歴史―その発想と由来―について更に解明すると共にそれが盛岡系との相違点を明瞭にした。殊に歴史には藩公に献上した由来、又近世では先帝昭和天皇の天覧に供したこともめくら曆が過去に於て大衆の為に力強い存在であった事を明かにした。(続)

疎開期間は昭和十九年(凸圖)八月二十三日から二十年十月二十五日までの一年余りだった。

神奈川県では次代を背負う少国民を米軍による空襲の惨禍から護るため横浜・川崎・横須賀・三市の三年生以上の児童十万人を急速に疎開させる方針を決めたのである。受入能力の関係で縁故疎開六、集団疎開(縁故先のない児童)四の割合で県内消化を原則として父兄に協力を要請した。

受入先は各市町村の海岸地帯を除く旅館、寺院、別荘等を予定。小田原市では

横浜市立大岡国民学校の四百五十名を受入れ池上眼蔵寺に疎開本部を置き左記の十ヶ寺に分宿した。

- 荻窪……龍洞院
- 中島……福厳寺・吉祥院
- 谷津……高長寺、福泉寺
- 本誓寺、鷹巣院
- 桃源寺、浄永寺

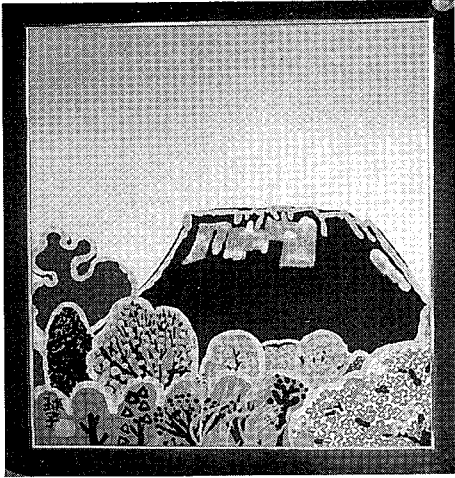
- 学習場所
- 池上、荻窪……若子小学校
- 中島分団……町田分教場
- 入谷津分団……本町国民学校

指定病院

- 緑町……小林病院
- 井細田……安間医院
- 費用は学校負担

片岡先生は浄永寺に分宿疎開児童たちと起居を共にされたのである。

老夫人の話によると先生は児童たちが寝静まった後本堂の一隅で絵筆を執られている姿をよくお見受けしたという。どんな絵を描いて



春の富士 片岡球子画

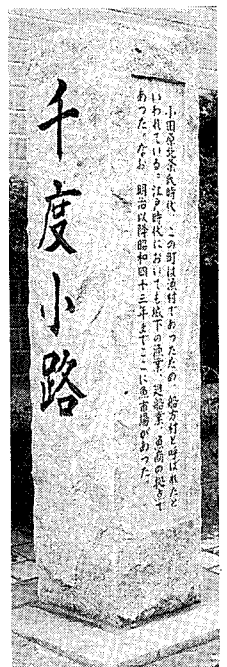
て居られたかは解らないが当時の先生は三十歳後半であり作画中のお姿が眼に浮かぶようである。

画伯の絵は日本画に特有の優美、繊細、典雅といった世界はなく、大胆なフォルム、鮮烈な色彩、強い存在感が迫ってくる。

御自分のスタイルが決まるまでには「落選の神様」とあだ名されたこともあり感性と信念を貫いて独自のスタイルを開花、数々の受賞作品を生み、昭和六十一年には文化功労者、平成元年には文化勲章を授章されたのである。

昭和三十年女子美大教授、四十一年には愛知華大教授、四十四年には三岸節子画伯などと女流総合展「湖」を結成されている。御二方は昨年春しくなられた桂ゆき画伯とならび日本画壇のパイオニア的な存在といわれている。

本年「平成四年」一月、



旧地名保存碑
せんどこうじ
(小田原市本町三丁目)

日本橋三越本店に於いて画業七十年展を開催されたが八十六歳の今も尚、独特の描写力で迫り若手には負けない意欲的なところをみせている。

藤沢市(辻堂東海岸)にお住まいの画伯は昨年の暮れ久しぶりに若いお弟子さんを同道、浄永寺を訪れ大変懐かしがられたという。

五、寺宝(重要文化財)

一、浄永寺の日蓮聖人の画像種類員数
絵画 一幅

所在

鎌倉国宝館

所有

小田原市城山二一
二四二〇

指定
浄永寺

具指定(昭和三十三年六月十七日)

形状等

絹本着色 縦十九
横七十六・五

概説

この画像は日蓮聖人の説法画像で聖人が座っている右手に拈子(はっす)を持ち左手に経文を開いて説法している姿である。聖人の前方には竜が花瓶に巻きつき宝珠を捧げて聴聞している。特別の図柄で女人成佛を意味している。もとは極彩色の美しいものであったが画面の剥落がひどく色調もすすけて所々に補筆色の跡が見られる。製作年代は桃山時代と推定される。

ら授与されたもの。
二、浄永寺文書種類員数

古文書 一枚

所在
鎌倉国宝館
所 有
小田原市城山二一
二四―二〇

指定
浄永寺

市指定(昭和五十五年三月四日)

形状等
北條氏康書状(年不詳六月八日)

日源上人(三世)

あて(三〇・七種 ×四二・二種)

この文書は北條氏康が出陣に際してこの寺に合戦の勝利を祈願しそれを謝した書状

重要文化財の保存管理については広い境内に樹木が繁り死角も多く防火体制(自動火災報知機、消火栓、避雷針の三点セット)空調設備等予算の關係上万全を期すことは難しいため鎌倉国宝館に預け年一回十月十九日の

丹沢の植物

⑮

城川四郎

神奈川県内の植物分布を調べてみると、植物によって極端に分布のかたよが見られるものがある。ここにご紹介するギンバイソウもその一つに挙げることができる。茨城県以西の本州・四国・九州に分布し、湿り気の多い林縁や沢の斜面な

どに生える。関東以西の分布だからといって、暖かいところが好きだというわけではなく、暖帯上部から温帯域にかけて分布する。前回ご紹介したヒコサンヒメシヤラなどと同じソハヤキ要素の植物と考えられる。分布域内では特に珍し

ギンバイソウ (ゆきのした科)
Deinanthe bifida Maxim.



著者原図

いという植物ではないが、神奈川県では丹沢山地周辺にしか見ることができない。格別、植物に関心のない人でも、山を歩いてこの植物の葉の先が二つに割れているのに気がついたら、興味をそそられるに違いない。だから、一度、出会ったら忘れにくい植物であろうと思う。

花は茎の先に十個ぐらい集まって咲く。はじめ、花の集まりが四枚の包に包まれた球形の蕾の状態で、やがて包を開いて数個の短い花柄が伸びる。周辺には三個の、がく片が大きくなった装飾用の中性花がある。同じ「ゆきのした科」のアジサイの花を頭に浮かべて頂ければ、あの花は装飾用の中性花ばかりである様子が思い浮かべられるであろう。装飾用の中性花には雄しべも雌しべもない。ギンバイソウには中性花のほかに両性花もある。両性花には雄しべ、雌しべがあり、実を結ぶ。

花が白く、下向きに咲くことから銀梅草という優雅な名前を貰っているが、この花について、とりたてて美しいとか可憐という感想を聞いたことはない。

御会式に里帰りするという現状である。
六、結び
浄永寺を訪ねた折に老夫人の注いだお茶を啜りながらの茶飲み話が秘史を書く切っ掛けとなった。
梅花月帯びて

一枝新たなり
早雲が谷津山に寺を開いてから四百九十余年、この参道を登った戦国大名や封建領主たちの足音や息づかいが聞こえ時代の世相が織りなした秘史の痕跡が見えてくるのである。(了)

資料

『浄永寺略縁起』

『新編相模風土記稿』

『史記評林』

『田単列伝』

『現代の日本画』(6)

片岡球子

『小田原近代教育史』(付記)

この稿を綴るにあたり神奈川県立図書館調査資料室や、浄永寺住職中橋教樹(三十八世)ご夫妻並びに老夫人より資料の提供と助言を賜わりました、略縁起の解析について小田原市寿町五ノ十一ノ二十八柳川泰久氏よりご教示を得、心から謝意を表します。

紅蓮洞・坂本易徳 ⑬

岡部忠夫

『函東会報告誌』の創刊号は、明治二十二年(一八九)十月二十九日に出版された。

この年は、六月に帝国大学文科大学に国史科が設置された。十一月になると帝国大学の歴史学者を中心に第一回の会合が持たれ、十二月に入ると、月刊『史学会雑誌』(のち『史学雑誌』に改題)が創刊された。この雑誌は、戦争中の昭和十九年(一九四四)休刊を余儀無くされたが、昭和二十五年(一九五〇)に復刊されている。

それに較べると『函東会報告誌』は、明治三十一年(一八九六)十月の第四十八号あたりで消え去っていった。わずか九年ほどの短い寿命であった。

もっとも、その短命の引き合いに、『史学雑誌』の長命を持ち出すのはお門違いである。その基盤が異なる。

『函東会報告誌』の廃刊は、その母体の函東会が存

続してゆく意義が薄れてしまったからに他ならない。消えるべくして消えていった。組織を維持する活力が失われたからだという結果論的な答しか考えられないが……。

ところで、函東会が自然消滅していった、明治三十年代という、わが国の教育が転換点にさしかかった時期にあるという見方がある。

明治維新直後の時期、教育を当然のことと考え、教育の価値を知っていたのは、だれよりも旧藩閥係者であり、人口の六〇程度をしめたにすぎない士族たちであった。義務教育はともかく、中等以上の教育を真先に必要と、要求したのが、他ならぬかれらであったのは、当然といってよいだろう。

う。そして、そこにハングが、中等教育のための学校の設立にかかわり、それらの学校に旧藩士の子弟を送りこもうと努力をつくす現実的な基盤があった。中・高等学校教育は、藩閥の延命策としてでなく、士族の救済策として、「教育授産」として重視されたのである。

しかも初等教育が行きわたり、士族以外の人たち「平民」たちも教育の価値に気づくようになると、中等以上の教育や学校は、急速に士族の子弟だけのものではなくなっていく。「四民平等」の教育が、中等段階以上の学校でも要求され、教育はハングではなく府県や国家士族だけではなくすべの府県民・国民のためのものでなければならなくなっていく。明治三〇年代は、そうした転換「教育授産」の時代の終焉のときであった。

(天野郁夫『学歴の社会史』新潮社)

以上の論旨は、長州、加賀、鹿児島、佐倉、福岡、丹波篠山などの旧藩の事例を中心にまた、外山正一(東京帝国大学初代社会学講座担当・帝国大学総長、文部大臣)著の『藩閥之将来』の一部を引用し、それぞれ地域の中等学校が、旧藩の教育的エネルギーを明治二十年代迄維持したが、明治三十年代になると、持ちこたえられず、いずれもが県立に移管されていった事実に基づくものである。

しかし、この論を、旧小田原藩領を中心とした地域社会に当てはめた場合、残念ながらそれは当てはまらない。明治三十年代の教育転換の時代を、函東会の消滅に直接結びつけるには無理がある。小田原では既に明治十年代に息切れしてしまっている。

六郡(足柄上、下・大住・洵綾・愛甲・津久井)共立の小田原中学校が、明治十一年(一八六六)廃止の小田原師範学校中等科の校舍、書籍・器械など施設・設備を受け継いで、開校されたのは、翌十二年十二月のことである。

しかし、同十四年(一八八)には、津久井郡が脱落して五郡共立となった。「さらに学校資金の運用も悪く、教科課程でも対立がおこって、財政難におちいり、一八八四年(明治十七年)七月より休講となったまま、やがて廃止されてしまった『神奈川県史』通史編4近代・現代)

これではならじと、足柄下郡の有志は、中学校跡に明治十九年(一八八六)郡立小田原英学校を開校するに至った。しかし、経営困難のため翌二十年三月、廃校となってしまった。

ここで再び前掲の天野郁夫氏の『学歴の社会史』を引用すると、

前でふれた外山正一の『藩閥之将来』には、「学資金及育英法ノ著明ナル者」という一章がある。そのなかでかれは「各府県ニ於ル教育事業ノ成否ハ決シテ偶然ノ結果デハナイ」、それは「有志家ニ於テ、意志的故意的ノ尽力ガ有ルカ無キカニ由ッテ」決まるのであるとして、

教育熱心な県や地域の例を次々にあげていく。……すぐ気づくのは山口、石川はいうまでもなく、福岡、高知、佐賀、鹿児島と、すべて旧藩と関係したケースだという点である。それにくらべて、と外山は批判する。新潟県はどうか。一〇年も前に知事が資金をつのって、「高等学校ヲ興サウトイフ計画ヲセラレタ所ガ、一向ニ賛成者モナカッタ」。それは「人口ヤ富ノ事情ノ故ナノデハナイ」。「社会ノ主動者タル有力卓見ノ先輩元老ノ鞏固ナル団体」が新潟には存在しないからだ、と。

ここで外山がいつている「社会ノ主動者……鞏固ナル団体」とは、具体的にいえば、旧藩を基礎にした育英団体、あるいはそれに準ずる団体のことである。

以上の論をそのまま旧小田原藩をそのまま引用することは出来ない。旧小田原藩の場合、旧藩を基礎とした団体といえ

小田原有信会である。

その沿革は、明治十二年(一八七九)五月、保護社の設立に始まる。同二十一年(一八八八)九月、小田原共同会と改組、明治三十二年(一八九〇)十月、共同会を解散、小田原有信会の設立という経過を辿っている。

〔註〕現在の小田原有信会は、戦後GHQの指令により解散を命じられ、その後昭和二十八年(一九五三)に復活が計られたものであり、その際会員には、旧小田原藩士の子弟以外の人も加わり、会の性格は、文化的友誼的の面が強まっている。

この会は、保護社、小田原共同会時代には、旧藩士に対する救済扶助の事業を主とし、育英的の事業が実施されるようになったのは、小田原有信会になってからである。それも明治三十八年(一八九五)になって始めて旧藩士の子弟のうち、小田原中学校(当時神奈川県立第二中学校)生徒の中で学業優等なる者七名に対し大久保家(旧藩主)付託救助金規程の教育奨励金を支給するという程度のもので第一回の卒業証書授与式を翌年

三月に控えてのことである。

この教育奨励は、大正五年(一九一六)になると、中学校または専門学校以上の卒業生全員と、在学生で学年末の成績優等者を対象とするようになった。大正時代に入ってから中等・高等教育の拡充整備が行なわれ進学率が高まった時流を反映してのことといえよう。

さらに、大正十四年(一九二五)には、学業奨励金を学年試験優秀者に付与していたが「近年教育制度ハ学年試験ヲ重視セザル傾向」にあるので、これを廃止し、卒業生だけに限定された。この制度は、昭和初頭に入ると、奨励金でなく万年筆に変わった。卒業者の増大に伴う処置と考えられる。

一方、学費貸与制度が実施されるようになったのは、大正十年(一九二一)からで、旧藩士の子弟で、官公私立の専門学校、大学に在学し学費に乏しい者を対象とした。しかし、貸費生は年間二、三名程度と、その数は少なかった。

以上のように、旧小田原藩の育英制度は、長州、加賀、鹿児島、佐倉、福岡の

旧藩に較べると、その発足は極めて遅い。

しかし、その原因を前掲外山正一の「社会ノ主動者デアル、有力卓見ノ先輩元老ノ鞏固ナル団体」が存在しなかつた新潟の例に求められるであろうか?

旧小田原藩を基礎とした強固な団体が存在しなかつたのは事実である。その理由についていくつかの論を援用してみよう。その当否は別として……。

小田原藩は、一時官軍に背いたため、朝敵藩という烙印を押され、行政区画が小田原県から足柄県へ、さらに神奈川県へ併合させられ、政治的に翻弄されたという見方がある。

小田原藩士たちは、明治戊辰戦争で痛めつけられている。

戊辰戦争で官軍に組するか幕府軍に味方するかで藩論が揺いだのは、藩主忠禮侯が、高松藩松平家の出で大久保忠愨侯の養嗣子として、家を継いだ人で、ために藩内で指導力を発揮できず、藩論をまとめ得なかつた、という考え方をしている。また、大久保家は忠隣侯

の代に改易され、孫の忠職侯の代に騎西(埼玉)で復活、その後、加納(岐阜)、明石(兵庫)、唐津(佐賀)に転じ、次の代忠朝侯のとき佐倉(千葉)に移され、再び小田原に戻り、大久保家は返り咲くことになるが、そのため藩士の出身地が一樣でないため、人間関係が複雑で藩の結束力が弱く、小田原評定を生む土壌があったと見る人もいる。

いや、小田原の人たちは、一つの旗の下に結集する凝聚力に欠けていて、一つの事をまとめあげるのには、難しい、という見解を持つ人もいる。

以上の論議はともあれ、明治十年代後半、いち早く消滅していった、五郡共立小田原中学校や足柄下郡小田原英学校。それを設立、維持しようとした担い手は、地域の町方や村方の有志素封家たちで、旧小田原藩領を母体としても、旧小田原藩士たちを基盤としたものでなかった。それは、旧藩の総没落の中に士族たちは、逼息した生活を余儀なくされたことを物語る。

古墳遍歴(九)

知られざる皇陵(3)

飯田悟郎

日本武尊

日本武尊(ヤマトタケルノミコト)、別名倭武命は二云うまでも無く日本古代史最大の英雄で、その生い立ち、幼名、童名、事蹟、改名のいきさつなど、あまねく知られており、酒匂川の名の由来や、妃の弟橘媛を偲ばれた吾妻山の存在など、この地域にも数々の足跡を残していきまして、この方を奉祀する社も、足柄神社・寒田神社・松原神社をはじめとして小さな祠にいたるまで数多く、私たちにもごく身近に感じられるのですが、その華々しい業績にひきかえ、その最期の地とか、葬られた陵墓とかは、一度でも訪れたことのある方は殆ど居られないのではないのでしょうか。

以降にその所在を記しますので、会員の方々の中にこの機会に参拝したいと思われる方がございましたら

ば幸いです。

此処で一寸本題から離れますが、日本武尊を埋葬してあると称している古墳は、東は名古屋の熱田神宮の傍らの白鳥古墳にはじまって、西は大府塚市にある仁徳天皇陵の陪冢とみられる白鳥古墳まで、その数は二十に余り、この方の名が如何に有名であるかを如実に示しています。

然し、宮内庁が認めているのはそのうちの三つ、三重県亀山市の能褒野墓と、奈良県御所市の琴引原陵と、大阪府羽曳野市の古市白鳥陵だけです。

三つといっても大したもので、普通は皇陵は一つだけ。陵墓参考地を含めても二つある例は少ないのに、日本武尊だけ三つもあるのは、紀・記にありますように、一度葬られた日本武尊の靈魂が白鳥と化して飛び立ち、二度地におりた後、更に天高く飛び去って行か

れたため、その地に陵を築き靈を慰めたためとか。

一般にはあまり知られていないことですが、宮内庁では皇室関係の陵・墓を厳密に区別していきまして、天皇・皇后と称される方々の埋葬してあるところを陵と云い、その他の皇族の埋葬地を墓と呼んでいます。

それでは、日本武尊の最期の地と云われる能褒野墓はともかく、他の二つが陵と呼ばれているのは何故でしょうか。

完全な形では残っていませんが、『常陸国風土記』では日本武尊のことを倭武天皇(ヤマトタケルノスメラミコト)と呼び、その伝えられている姿は紀・記とはかなり異なっています。

また、第十四代仲哀天皇は日本武尊の第二皇子だと云われていて、第十三代の成務天皇は兄君の日本武尊の功績を尊重されるあまり、自らの御子をさしおいて、皇位を譲られたとのことですが、そうした場合父君が天皇でなくても、天皇という尊号を追贈されることはその後にもよくあることなので、日本武尊の場合にも天皇に準ずる扱いとなり、

墓でなく陵と尊称されているかも知れません。

日本武尊終焉の地と伝えられる能褒野墓(ノボノハカ)は、前述の如く三重県亀山市田村に所在します。

鈴鹿川の支流の安楽川に臨み、能褒野橋の上手に築かれたかなりの規模の古式の前方後円墳で、周囲に幾つかの陪冢(バイチョウ、主君に殉じた従者の墓で、死後も付き従うために主墳の周囲に築かれたといわれます)を従え、重厚荘重、一見して尊貴の人の埋葬されていることが分かります。

ここに詣でるのは一寸厄介で、関西本線井田川駅が一番近いのですが、そこから能褒野橋までは二キロ余り。亀山の駅からでないタクシーもなく、バスも便がわるく、道を探ねながら歩くほかなりません。

すこし不思議なのはこれが隣接する能褒野に所在せず、さまで離れていないとは言え田村に在ること、これは、明治初期に各地の皇陵を比定したとき、近隣で一番立派な古墳を日本武尊の墓としたためだとかで、実際にこの付近には、うそかまことか、日本武尊の墓と

伝えられる古墳が幾つか存在しています。

白鳥と化した日本武尊の靈が降り立った第一の陵は、琴引原(一説には琴弾原)白鳥陵(コトヒキハラノシラトリノミササギ)と云い、

奈良県御所市富田にあります。既述の孝安天皇陵の少し南、池ノ内の集落の背後の丘がそれで、周囲を巡ることもできますが、どうやら人口のものではなく、自然の丘陵と思われれます。

大阪にある第三の陵は古市白鳥陵(フルイチノシラトリノミササギ)と云い、羽曳野市軽里にあるいかにも皇陵らしい堂々たる構えの前方後円墳で、近鉄線古市駅からは歩いて十分ほどとそれほどの距離でもありません。

この地域は古市古墳群と呼ばれていて、大小各種の古墳が数多く、有名な応神天皇陵のほか、安閑天皇陵、清寧天皇陵、仁賢天皇陵、少し離れて仲哀天皇陵、允恭天皇陵もあり、これらの御陵に詣でるも良く、また、最近発掘物で名を知られた峯ヶ塚古墳もこの近くであり、ゆっくり一日を過ごせるかと存じます。(続)

落穂集

◎パブルがはじけて軒並み売行き不審で不況感が強い今日この頃、売れ過ぎて困っている店がある。「ういろう」がそれ。別に宣伝これ努めている訳ではない。漢方薬プームに乗ってのことである。箱根に泊って帰りがけであろう、ハイヤーで店に乗りつける人で行列ができる。「ういろう」では、それに対応してか、日・水・金の週休三日、午前九時から午後五時半の営業時間で、売上制限して、「ういろう」を一人に一匁しか売らない。そして店に「お願い」と題して、次のチラシを置いてある。

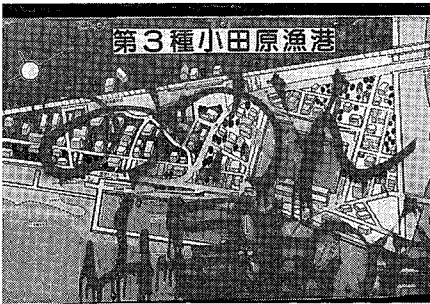
この品は天然物が原料でございまして科学合成物質で出来ているではありません。せん。原料の品質が良くなければ、良い製品は造れません。先頃と違い、公害が拡がり地球が汚染され、良質の植物が少なくなっております。又これを採集する人達も資本主義の圧力に押し寄せ、効率的集量ばかり要求されてしまったため、昔のように良質の生薬は、市場に非常にわずかしか出なくなりました。このように、良質の原料が以前のように入手出来ず、選別

しなければならなくなりまして、多く造ることができなくなってしまいました。品物が少ないために『子供のときから此の薬で助かっていたので年寄りになってもこれが手に入らなくなり、どうしたらよいか途方にくれている』と言われる老人の方も多いです。お求めになる方の行列を見ると興味本位で、何に効くのかも知らずに買おうとされる方、他人に頼まれて、一日に何回でも買われる方、自分の商売の糧に買いためられる方、大勢の方を引き連れて買い占めていかれる方、この様な人達のために、本当に必要な方にお渡しできなくなり、製造元としては大変苦勞致しております。どうぞ自分さえお手に入れれば良いという狭いお考えでなく、本当にこの薬が症に合っていて切らすことの出来ない方にお渡しできます様、ご協力お願い申し上げます。まだ御使用された事のない方は、御自分の症に合うかどうかもお分らない訳ですから、そう使わないでおい下さい。

現在は新しく開発された良い薬が沢山出回っておりますので、そのような品の

中から御自分に合うお薬をお探し下さいませ。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ついに、チラシの全文を記してしまいましたが、伝統ある老舗の良心というべきものであろうか。◎ちよっと旧聞に属するが、所要あって北海道に出かけた人の話。去る一月十五日(金)たまたま札幌のホテルにいたが、突如大揺れ。つまり伊東川奈沖を震源とする大地震発生と判断。すぐさま、小田原に電話を入れたところ、少し揺れたがたいした事なかったという家人の返答。瞬間、小田原の人も、震源が釧路とは思わなかったのではなからうか。



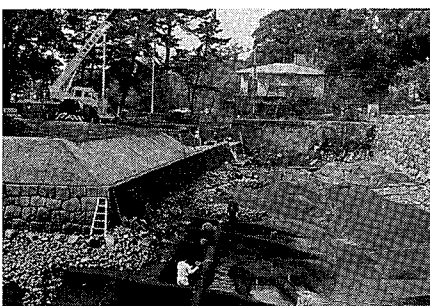
不心得者

会員消息

お詫び 一五一号の訂正

項	段	行	誤	正
26	1	6	小田原叢談(十) 自・軽車 遠州灘へ：	小田原叢談(十二) 自動車 静岡・県羽島(初島の別称)近傍で
21	1	2	遭遇難波 潜称帝 正面には 法門	遭遇難波 替称帝 正面は 法門
19	3	10	蛇形の画像を(女人 訪門 を)	蛇形の画像(女人)を
18	2	1	雑木林で深々 とつまれ竹 林、野山で	雑木林や竹林で深々とつまれ
19	3	34	して権力者の 内田三枝子	して本格的な権力者の 内田美枝子
20	4	32		

◎相澤栄一氏、この度、『おだわら―歴史と文化―』第六号に「戦時下における文学運動」と題した一文を発表され、その中で小田原に於けるプロレタリア



小田原城址二の丸復元工事

◎十七ページの「新刊紹介」に記したが、高田喜久三、内田清の両氏は、写真集『小田原の昭和史』の監修をされた。また、高田稔氏は、労作『神奈川の寺小屋地図』をまとめられた。

会員計報

隠岐威重氏(小田原市南町三一―一五)本年一月十八日(月)逝去されました。享年七十五歳。御冥福をお祈りします。

小田原史談会諸行事等

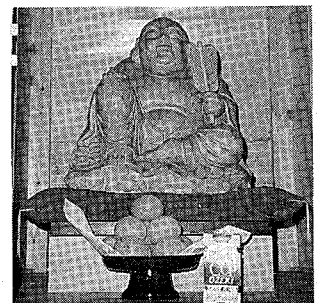
初詣箱根七福神めぐり

平成五年一月十七日(日)八時
小田原駅前出発。十五時三十分
帰着

烟宿・守源寺・大黒天、町立寄
木会館―箱根・県立恩賜公園離
宮跡・駒形神社・毘沙門天
〔費用五千元〕
〔参加者〕四十七名(敬称略)

〔コース〕小涌谷・山王神社・
福祿寿―芦ノ湯阿字ヶ池弁天・
弁財天：芦ノ湯・東光庵跡―元
箱根・箱根神社・恵比寿神―昼
食―元箱根・興福院・布袋尊―
向田重忠、岩本武、奥津定・子

ヨ子、菊池八千代外一名、川口
新太郎、小林房子、増山豊子、
中澤銀子、剣持芳枝、山口広子、
田中ヒサ江、遠井喜代子、渡辺
昭子、大河原安、南陽子、杉山
サヨ子、初田裕子、小西マツ、
角田道、瀧野国雄・幸江、西郷
富子、内田公子、森美那子、府
川宏江、山口わか・安子、田口
鏡子、笠恵子、中村俊郎・ツヤ、
松本巽、稲子藤江、高橋アヤ子
(順不同)



箱根七福神 田口鏡子

天野宏氏理事に
このたび、天野宏氏が理事に推
挙された。



県立恩賜公園 中村俊郎

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 足柄香粧株式会社
 飛鳥屋
 紳士服のアメリカヤ
 画材 ガクブチ めうえ
 伊勢治書店
 かまぼこ
 株式会社 江島
 税理士 小澤重治事務所
 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 オートセンター・スギヤマ
 小田原中央青果
 オリオン座
 かまぼこ籠
 鐘紡株式会社小田原工場
 カボウ化粧品鴨宮工場
 神尾食品工業
 木地挽 日下部産業
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 (有)小松石材店
 さがみ信用金庫
 宝飾専門店 Shimano

中華料理 昇玉
 杉山水道工業
 辰野又スポーツ
 大宮不動産
 割烹 おるほ
 茶半家具株式会社
 ちんろう本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トーホー建物齋店
 八小堂書店
 八子マサ店
 平井書店
 富士写真フイルム齋小田原工場
 株式会社 報徳
 松坂屋
 学生専科 マルク
 食器の店 マルサンストア
 みつゆき設計
 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
 湯浅電池齋小田原製作所
 防災器具 優光社

振替 横浜(2) 六四三三六